

さん の がわ い せき

三ノ側遺跡 (県立都留興譲館高校地点)

山梨県立都留興譲館高等学校建設事業に伴う発掘調査報告書

2017. 3

山梨県教育委員会

さん の がわ い せき
三ノ側遺跡 (県立都留興譲館高校地点)

山梨県立都留興譲館高等学校建設事業に伴う発掘調査報告書

2017. 3

山梨県教育委員会



三ノ側遺跡上空から西側を臨む



2 区 1 号溝状遺構

卷頭写真 2



第5区・第6区（空中モザイク写真）



第5区西壁基本土層

三ノ側遺跡（県立都留興譲館高校地点）のあらまし

三ノ側遺跡は、都留市田原から上谷にかけて位置する大規模な集落遺跡です。この報告書は、山梨県立都留興譲館高等学校の新校舎建設事業に伴って行われた埋蔵文化財の発掘調査の成果をまとめたものです。

これまで、三ノ側遺跡は都留市教育委員会や、山梨県埋蔵文化財センターによつて、発掘調査が進められてきました。なかでも昭和 56（1981）年、都留市教育委員会により実施された調査では、皇朝十二銭の「和同開珎」わとうかいちん や「富寿神宝」ふじゅしんぱう と呼ばれる銅錢、銅製の小壺などが出土しました。また、当センターが平成 23（2011）年に実施した山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス地点（以下、「平成 23 年度地点」という）においても、奈良・平安時代の建物跡が見つかっており、様々な地域から持ち込まれた土器が出土し、注目されました。

さて、古代の甲斐国は 4 つの郡に分かれていますが、そのうち東部地域は都留郡と呼ばれます。都留郡はさらに 7 つの郷によって成り立ちますが、その中の多良郷が現在の都留市田原周辺にあったと考えられています。三ノ側遺跡は貴重な出土品もあることから、多良郷の中心的な役割を担っていたと思われます。



写真 1：遺跡の発掘調査の様子

今回の調査地点は、平成 23 年度地点の東側にあたり、調査前は遺跡の範囲ではありませんでした。しかし、遺跡の存在を確かめる試掘調査をおこなうと、土坑や土器が見つかったため、本格的に調査を実施することとなりました。現状では、三ノ側遺跡の一番東側に位置しています。

発掘調査は、平成 25 年度と、平成 27 年度の 2 期にわたって実施し、合計 7 つの調査区を設定しました。発掘調査した遺構や、出土した土器などの遺物については、平成 26 年度、平成 28 年度に整理作業を行い、本書として報告されました。調査では、合計で 22 条の溝状遺構、2 基の連続溝状遺構、1 棟の掘立柱建物跡、土坑 79 基、4 列の柵列遺構、99 基のピットが見つかりました。



写真2：出土した土師器の破片

2区では、1号溝状遺構が発見されました。遺構の中からは、平安時代の土器の破片が出土しました。この溝状遺構は、近代の地割（地籍の境界）にほぼ沿っており、この溝を境にした土地の使い分けが、伝統的に続いている可能性を想定できるものです。

4区・5区・6区では、中世から近世のものと考えられる、円形の土坑や、長方形の溝状遺構が多数発見されました。なかでも、溝状遺構がいくつも繋がった形をしているものを、連結溝状遺構と名付けました。2号連結溝状遺構からは、土師質土器や、須恵器の甕の破片を再利用した砥石などが出土しました。また、6号土坑からは、3枚の渡来銭が、紐を残した状態で重なって見つかりました。

7区では、1棟の掘立柱建物跡が発見されました。柱穴に堆積した土の様子から、中世以降のものと考えられます。また、7区の東側で、平安時代初期の遺物が出土する土坑群を検出しました。調査区が狭いため、その全貌はわかりませんが、土坑が並んでいることから、こちらも掘立柱建物跡の可能性があります。掘立柱建物である場合、

その軸線（列の傾き）が、平成23年度地点のものと同じ向きになり、興味深い事実です。

今回の調査では、三ノ側遺跡の東側の状況を確認することができました。古代の遺構は、2区や7区など南東側でみつかっており、7区のさらに東側にも古代の集落が続いていくと考えられます。また、5区で特に集中してみつかった中世や近世の遺構は、三ノ側遺跡が古代から中世・近世と連続的に土地利用をしていましたことを示す、重要な成果です。

今後さらに三ノ側遺跡が調査研究されていくことで、古代都留郡多良郷の姿が、徐々に解明されいくものと思います。



写真3：7区の土坑群



写真4：出土した中世の渡来銭

序　文

本書は、2013（平成25）年度及び2015（平成27）年度に発掘調査が行われた三ノ側遺跡の発掘調査報告書です。三ノ側遺跡は、過去に都留市教育委員会や当埋蔵文化財センターにより調査がおこなわれているため、報告書名に（県立都留興譲館高校地点）を付しました。その名の通り、東部地域に新しくできた総合制高校である、山梨県立都留興譲館高等学校の校舎建設に伴って、発掘調査が実施されました。

三ノ側遺跡は、東西約1000m弱の範囲が遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）として認識されています。そのうち、1981（昭和56）年に都留市教育委員会が発掘調査した地点からは、奈良・平安時代の建物跡がみつかり、皇朝十二銭である和同開珎・富寿神宝や、銅製の小壺が出土しました。貴重な出土品の存在から、三ノ側遺跡は古代都留郡の多良郷における、主要な集落であると推定されています。これ以降の発掘調査においても、奈良・平安時代の建物跡などの遺構を中心に、中世や近世の遺構・遺物もみつかり、古代から中世・近世にかけての複合遺跡であることが分かっています。

本報告における発掘調査では、22条の溝状遺構、2基の連続溝状遺構、1棟の掘立柱建物跡（中世以降）、土坑79基、4列の柵列遺構、ピット99基が見つかりました。土坑のなかには、掘立柱建物跡の可能性のある古代の遺物を出土する土坑群があり、奈良・平安時代の集落範囲がさらに東側へ拡大するものとして示唆的です。また、旧地籍と平行するような溝状遺構も確認され、古代より土地が継続的に区画されていた可能性を指摘できます。また、今回の調査では、中世や近世に比定される遺構も多数発見されました。都留市田原の土地に、連鎖と人々が生活し、今なお中心的な地域であることがわかります。

開発に伴って、地下の遺跡は破壊されてしまいますが、記録として本書が永久に保存され、遺跡の情報を引き出せるように、小さな出土遺物についても掲載するように努めました。本書が、地域における歴史学習や研究のために、多くの方にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査にあたりご指導・ご協力をいただいた関係者、関係機関に厚く御礼申し上げます。

2017年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 中山 誠二

例　　言

- 1 本書は、山梨県都留市上谷に位置する三ノ側遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の調査原因は、山梨県立都留興譲館高等学校（事業当初は東部地域総合制高校）新校舎建設事業に伴うものである。山梨県教育庁学術文化財課が同学校施設課から依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センターにより発掘調査および発掘調査報告書作成を実施した。なお、調査組織・体制については第1章第5節に記した。
- 3 本書の執筆・編集は熊谷晋祐・柴田亮平が行った。出土したウマの歯の所見は山梨県立博物館学芸員：植月学、埋蔵文化財センター非常勤嘱託：塩谷風季による検討を基にしている。また、第5章は自然化学分析を委託した株式会社加速器分析研究所の報告書を掲載した。第5章以外の主な執筆者は以下のとおりだが、全体の構成は熊谷がおこなった。文責は熊谷にある。

第1章 柴田亮平・熊谷晋祐 第2章 柴田亮平 第3章 柴田亮平・熊谷晋祐
第4章 (1) 柴田亮平 (2) 熊谷晋祐 第6章 熊谷晋祐
- 4 発掘調査期間は工事工程の都合上2期に分かれる。第1期として、平成25年11月18日から平成26年2月28日まで発掘調査を実施し、平成26年10月1日から平成26年10月31日まで整理作業を実施した。第2期として、平成27年10月1日から平成28年3月31日まで発掘調査及び整理作業を実施、平成28年11月1日より平成29年3月17日まで整理作業ならびに報告書作成を実施した。
- 5 遺構・遺物の写真については村石眞澄・柴田亮平・熊谷晋祐・加々美鷦実が撮影した。
- 6 本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 7 第2期発掘調査に係る国土座標・グリッドポイント設定・基準標高測量は、昭和測量株式会社に委託した。また、遺跡空中写真撮影・図化作業は株式会社テクノプラニングに委託した。
- 8 遺構の測量及び図化システムとして、株式会社CUBICの「遺構くん」を使用した。
- 9 調査にあたり、次の方々からご教示・ご協力をいただいた。記して謝意を表する。(順不同・敬称略)
山梨県立都留興譲館高等学校、都留市教育委員会、森屋雅幸、平野修、植月学、佐々木満

凡　　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は、各図中に示した。原則として、遺構は溝状遺構・掘立柱建物跡・柵列状遺構は1/60、土坑及びピットは1/40・1/60とし、遺物は土器・陶磁器1/3、古銭は2/3である。
- 2 調査年度ごとに遺物を注記し、平成25年度分は「H25三ノ側〇〇」平成27年度分は「H27三ノ側〇〇」とした。
- 3 遺物実測図は口径および底径が復元できるものを基準に選定したが、胴部の破片であっても年代的特徴等が分かるものについては報告した。
- 4 遺構図版中のドットマークは遺物を示しており、付された番号はそれぞれの遺物に対応している。
- 5 遺構断面図の左側基点に付した数字は標高(m)を表す。
- 6 土器観察表中及び土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990年度版による。
- 7 遺物図版中の遺物断面を黒く塗りつぶしているものは須恵器を示す。また、土師器の黒色処理されるものには細かい網掛けトーン、須恵器転用砥石の磨耗面には粗い網掛けトーンを使用して表記している。
- 8 本報告書中遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000 地図を利用した。

目 次

巻頭写真図版

あらまし

序 文

例言・凡例

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	2
第2節 調査の目的と課題	2
第3節 発掘調査及び立会調査の経過	2
第4節 室内調査等の経過	4
第5節 調査組織	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法および基本層序	9
第1節 発掘調査の方法	9
第2節 基本層序	9
第4章 調査の成果	24
第1節 第1期調査	24
(1) 1区 (2) 2区 (3) 3区 (4) 4区	
遺構一覧表	26
遺構図版	27
遺物図版	33
遺物観察表	34
第2節 第2期調査	35
(1) 5区1面 (2) 5区2面 (3) 6区 (4) 7区	
遺構一覧表	37
遺構図版	40
遺物図版	49
遺物観察表	50
第5章 自然科学分析	51
第6章 総括	55
写真図版	
報告書抄録・奥付	

図 版 目 次

第 1 図 三ノ側遺跡と周辺の遺跡位置図	6	第 22 図 第 1 期調査出土遺物	33
第 2 図 三ノ側遺跡周辺詳細図	7	第 23 図 5 区 1 面遺構 1 (1・2 号連結溝状 遺構、1 号溝状遺構)	40
第 3 図 H 23 ~ 27 年度調査区	8	第 24 図 5 区 1 面遺構 2 (2 ~ 15 号溝状遺構)	41
第 4 図 試掘・範囲確認図	10	第 25 図 5 区 1 面遺構 3 (16・17 号溝状遺構、 1 ~ 9、11 ~ 16、立会 1 号土坑)	42
第 5 図 2 区南西側 遺構配置図	11	第 26 図 5 区 2 面遺構 1 (1 ~ 17、19・20、 40 ~ 42pit、22 ~ 28 号土坑)	43
第 6 図 1 区・2 区北東側 遺構配置図	12	第 27 図 5 区 2 面遺構 2 (29 ~ 54 号土坑)	44
第 7 図 2 区基本土層図 1	13	第 28 図 5 区 2 面遺構 3 (65 ~ 80 号土坑、 18 号溝状遺構)	45
第 8 図 2 区基本土層図 2・第 1 期調査グリッド 図	14	第 29 図 5 区 2 面遺構 4 (1 ~ 4 号柵列遺構)、 6 区遺構 (18 ~ 21 号土坑、34 号土坑)	46
第 9 図 3 区遺構配置図・基本土層図	15	第 30 図 7 区遺構 1 (1 号掘立柱建物跡、27、 29 ~ 38pit、55 号土坑)	47
第 10 図 4 区遺構配置図・基本土層図	16	第 31 図 7 区遺構 2 (28pit、57 ~ 63 号土坑)	48
第 11 図 5 区・6 区基本土層図	17	第 32 図 第 2 期調査出土遺物	49
第 12 図 5 区・6 区 第 1 面遺構配置図	18・19	第 33 図 分析資料の顕微鏡写真	54
第 13 図 5 区第 2 面遺構配置図	20・21	第 34 図 調査区と立会地点	55
第 14 図 7 区遺構配置図	22	第 35 図 7 区土坑群の性格について	56
第 15 図 7 区基本土層図	23		
第 16 図 2 区 1 号溝状遺構	27		
第 17 図 2 区遺構 (pit1 ~ 6、8、10 ~ 12、 24 ~ 25)	28		
第 18 図 3 区・4 区遺構 (pit14、17 ~ 19、 21 ~ 22、40 ~ 44)	29		
第 19 図 4 区遺構 2 (pit45 ~ 53)	30		
第 20 図 4 区遺構 3 (pit54 ~ 63)	31		
第 21 図 4 区遺構 4 (4 号溝状遺構)	32		

表 目 次

第 1 表 H23 年度～28 年度における三ノ側遺跡 調査経過の記録	2 ~ 4	第 8 表 第 2 期調査連結溝状遺構一覧表	40
第 2 表 三ノ側遺跡周辺の遺跡	7	第 9 表 第 2 期調査柵列遺構一覧表	41
第 3 表 第 1 期調査ピット一覧表	26	第 10 表 第 2 期調査出土遺物一覧表	50
第 4 表 第 1 期調査溝状遺構一覧表	26	第 11 表 放射性炭素年代測定結果	52
第 5 表 第 1 期調査出土遺物一覧表	34	第 12 表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補 正值、曆年較正用 14C 年代、較正年代)	52
第 6 表 第 2 期調査土坑・pit 一覧表	37・38		
第 7 表 第 2 期調査溝状遺構一覧表	39		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の三ノ側遺跡における埋蔵文化財発掘調査は、東部地域総合制高校建設事業に伴うものである。この事業により県立桂高等学校、県立谷村工業高等学校が統合し、県立都留興譲館高等学校が新設された。

三ノ側遺跡は山梨県都留郡田原から上谷にかけて位置する遺跡で、これまで都留市教育委員会、山梨県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われている。都留市教育委員会が行った調査では、昭和53年度の詳細分布調査で土器片が、昭和56年度、平成13・14年に行われた発掘調査及び平成20年度、23・24年度に行われた試掘調査では、奈良・平安時代の竪穴建物跡などが発見されている。近年では平成27・28年度にかけても発掘調査が実施されている（第2図参照）。

山梨県埋蔵文化財センターでは、平成23年度に県立産業技術短期大学校都留キャンパス地点における発掘調査を実施している（山梨県埋蔵文化財センター2013『三ノ側遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第290集）。その結果、奈良・平安時代の竪穴建物跡などが確認され、三ノ側遺跡を構成する集落が東側にまで広がっていたことが明らかになった。本報告の地点は平成23年度調査地点の東側に隣接する。

発掘調査にあたり、平成23・24年度に、旧谷村工業高等学校敷地内において試掘調査を実施している。第4図は試掘トレンチの配置図である。このうち、平成23年度試掘調査の6・7トレンチ及び平成24年度試掘調査の4・12・13トレンチでは、遺物包含層・遺構確認面が確認されず調査不要となったが、そのほかのトレンチでは、平成23年度発掘調査地点に対応する遺構確認面の上層が確認され、埋蔵文化財の保護措置が必要となった。試掘トレンチのうち平成24年度1・5～7トレンチでは遺構を検出した。これらの試掘調査の結果に基づき、発掘調査が計画され、平成24年12月14日をもって、三ノ側遺跡の範囲（周知の埋蔵文化財包蔵地）が従来より東側へ拡大変更された。

校舎建設に係り、新校舎・渡り廊下・弓道場・グラウンド施設（屋外トイレ、部室、倉庫）の掘削深度が、試掘調査で確認された遺構面よりも深くなることから、学校施設課、学術文化財課、埋蔵文化財センターの協議のもと、発掘調査による記録保存の措置がとられた。



調査着手前の旧校舎



調査終了後建設された新校舎（1区～4区）

なお、今回の埋蔵文化財調査における法的手続き等は以下のとおりである。

- 平成24年12月19日 文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を学校施設課より山梨県教育委員会教育長宛へ届出。（教学施第1061号）
- 平成25年1月10日 文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を学術文化財課より文化庁長官宛に通知。（教学文第2652号）
- 平成25年7月2日 東部地域統合制高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書を山梨県教育委員会学校施設課と学術文化財課で締結。

- ・平成25年11月8日 文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出。（教理文第498号）
- ・平成26年3月4日 文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出し、大月警察署への通知を依頼。（教理文713号）
- ・平成26年4月17日 総合制高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書（整理作業・報告書作成）を山梨県教育委員会学校施設課と学術文化財課で締結。
- ・平成27年8月17日 都留興讌館高等学校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書を山梨県教育委員会学校施設課と学術文化財課で締結。
- ・平成27年10月5日 文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出。（教理文第573号）
- ・平成28年2月9日 文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出し、大月警察署への通知を依頼。（教理文573号-1）
- ・平成28年4月5日 都留興讌館高等学校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書（本格的整理作業・報告書作成・刊行）を山梨県教育委員会学校施設課と学術文化財課で締結。

第2節 調査の目的と課題

平成23・24年度に実施した試掘調査により、遺物包含層および遺構が確認されている。これらの遺構・遺物の記録保存を第一の目的とする。また、三ノ側遺跡は東西に長い集落遺跡であるが、集落内における土地利用は、地点により異なることが想定される。発掘調査地点は現状の三ノ側遺跡の最東端にあたり、これまでに調査された地点の成果と比較することで、古代集落の変遷や性格を考察する。

第3節 発掘調査及び立会調査の経過

都留興讌館高校建設事業は、校舎建て替えの都合上、工程を2期に分けて実施している。発掘調査についても2期に分け、第1期として平成25年度、第2期として平成27年度に実施した。そのなかで工程の都合上7つの調査区に分け、第1期に1～4区、第2期に5～7区の調査をした。

また、旧校舎等の解体・撤去、新校舎及び仮設校舎の建設に伴い、立会調査を実施している（各年度『山梨県内分布調査報告書』を参照。）立会調査の成果については、第6章で整理する。

第1表 H23年度～28年度における三ノ側遺跡調査経過の記録

日 程	発掘調査にかかる経過	立会調査に係る経過
23 年度 平成24年 3月12日 15～16日		グラウンド水路の改修工事立会①
24 年度 平成25年 3月11～13日 18日		下水道管敷設工事立会②。 遺物が出土する
4月23日	発掘調査に先立ち、学校施設課、谷村工業高等学校、学術文化財課、埋蔵文化財センターの四者による現地協議を実施	
4月30日		給排水管理設工事立会③
6月13日		給排水管理設工事立会③
7月2日	「東部地域総合制高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」が山梨県教育庁学校施設課と学術文化財課の間で締結	
7月16～17日		給排水管理設工事立会③

25 年 度	9月 6日	学校施設課、営繕課、施工業者、学術文化財課、埋蔵文化財センターの五者による現地協議。発掘調査前に旧校舎の解体工事に伴う立会調査を実施することを確認	
	11月 18日	第1期調査開始	第四棟基礎撤去立会④
	11月 21日		第三棟基礎撤去立会⑤
	12月 3～6日	1区表土剥ぎ作業	
	12月 5日		
	12月 9日	1区全景写真撮影・埋め戻し、作業員出勤開始 2区表土剥ぎ作業開始（～1月17日終了）	第三棟北西トイレ・浄化槽等撤去立会⑥
	平成 26 年 1月 9～15日	3区表土剥ぎ作業	
	1月 14～20日	4区表土剥ぎ作業	
	1月 21日	3区全景写真撮影・調査終了・埋め戻し	
	1月 23日	2区全景写真撮影	
26 年 度	1月 28日	2区全景写真撮影・調査終了・埋め戻し	
	2月 6日	4区全景写真撮影	
	2月 7日	4区調査終了・埋め戻し、撤収開始	
	2月 10日	大雪のため、撤収作業を中断・雪かき	
	2月 14日	記録的な大雪のため撤収作業を一定期間中断	
	2月 24日	撤収作業再開・作業路確保のため雪かきを開始	
	2月 28日	プレハブ等撤収完了 第1期調査終了	
	6月 5日		電気設備事業立会⑦
	平成 27 年 3月 23日	学校施設課、営繕課、解体業者、学術文化財課、埋蔵文化財センターの五者による、第2期工事に伴う解体工事及び埋蔵文化財調査に係る協議を実施	
	4月 28日		立木抜根作業立会⑧
27 年 度	6月 1日		第二棟基礎撤去立会⑨
	6月 9日	発掘調査に先立ち、学校施設課、営繕課、興譲館高校、解体業者、学術文化財課、埋蔵文化財センターの六者による、第2期工事に伴う埋蔵文化財調査に係る協議を実施	
	7月 8日		第一棟基礎撤去及び立木抜根作業立会⑩
	7月 15日		立木抜根作業立会⑪
	7月 29～30日		第五棟基礎撤去及び立木抜根作業立会⑫
	8月 17日	「都留興譲館高等学校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」が学校施設課と学術文化財課の間で締結	
	10月 1～8日	第2期調査開始 5区の第1面表土剥ぎ作業	
	10月 5日	作業員導入	
	10月 28日	5区第1面の全景写真撮影、測量等	
	11月 4～9日	5区第2面（西側）の表土剥ぎ作業	
	11月 9日	6区の表土剥ぎ作業	
	11月 10～11日	世界測地系座標に基づく基準杭及びグリット杭設置	
	11月 18日		体育器具撤去立会⑬
	11月 25日	7区の表土剥ぎ開始（～12／1）	
	12月 1日	遺跡の航空空中撮影及び5区西側及び6区の図化用撮影	
	12月 7～18日	5区西側の埋戻し及び5区東側第2面の表土剥ぎ作業	
	平成 28 年 1月 8日	7区のポールによる空中撮影及び図化用撮影	
	1月 14日	5区第2面東側のポールによる空中撮影及び図化用撮影作業終了、撤去開始	
	1月 17日	大雪のため埋戻し等延期	

	1月 25日～ 2月 5日	5区東側・6区・7区の埋戻し作業、機材等の完全撤収 第2期 調査終了	
28年 度	4月 11～12日 18日		電気配線切り回しに伴う工事立会跡
	4月 26～27日		渡り廊下基礎掘削に伴う工事立会跡

第4節 室内調査等の経過

今回の発掘調査での遺物出土量は、プラスチック収納箱にして4箱となった。

第1期発掘調査に係る整理作業として、平成26年4月17日に「総合制高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」が締結された。第1期で出土した遺物の注記・復原を平成26年10月1日から10月2日まで、遺物の実測・トレースを10月2日から10月8日まで、図面・写真の整理を10月1日から10月9日まで行った。また、遺構・遺物図版の作成、原稿執筆を10月1日から10月31日まで行った。

第2期発掘調査に係る整理作業として、平成27年2月1日より3月31日まで、遺物の洗浄・注記・復元作業及び遺構の図面整理・写真整理等の基礎的整理作業を実施した。平成28年4月5日に「都留興譲館高等学校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」が締結され、平成28年11月2日から11月24日まで遺物の実測・拓本・トレース・版組・写真撮影等の本格的整理作業を実施、11月1日から平成29年3月17日まで原稿執筆、編集作業を行い、報告書を刊行した。

第5節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 八巻與志夫（平成25・26年度）、出月洋文（平成27年度）、中山誠二（平成28年度）

次長 福島一雄（平成25年度）、出月洋文（平成26年度）、保坂康夫（平成27年度）、高野玄明（平成28年度）

調査研究課長 保坂康夫（平成25・26年度）、山本茂樹（平成27年度）、今福利恵（平成28年度）

資料普及課長 山本茂樹（平成25年度）

史跡資料活用課長 山本茂樹（平成26年度）、今福利恵（平成27年度）、保坂和博（平成28年度）

調査担当者 資料普及課資料第一担当 村石眞澄、由井正昭（平成25年度発掘調査）

調査研究課調査第二担当 柴田亮平（平成25年度発掘調査）

調査研究課調査第一担当 柴田亮平（平成26年度基礎的整理作業・本格的整理作業）

調査研究課調査第三担当 熊谷晋祐（平成27年度発掘調査・基礎的整理作業）

史跡資料活用課史跡資料活用第一担当 加々美鮎実（平成27年度発掘調査・基礎的整理作業）

調査研究課調査第三担当 熊谷晋祐（平成28年度本格的整理作業・報告書刊行）

作業員

第1期発掘調査 有賀国雄 上野美紀 斧田文夫 小俣哲夫 小俣美明 小林茂 小林正彦 高尾和美

高田悦三 田中奈津代 植孝二 二部奈々緒 橋本俊一 原島靖親 堀内初 渡辺崇

渡辺めぐみ 渡辺洋一

第1期整理作業 新谷和美 清水真弓

第2期発掘調査 天野一重 生駒寿彦 小俣哲夫 稀代ゆき江 郷田信男 清水信夫 鈴木英夫 高尾和美

鶴巻典子 烏居末廣 二部奈々緒 山崎一男 山田正之 渡辺崇

第2期整理作業 芦沢陽子 小池美保子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

三ノ側遺跡は山梨県都留市田原から上谷にかけて立地している。都留市は山梨県の東南部、いわゆる郡内に位置しており、東は上野原市・南都留郡道志村、西は南都留郡富士河口湖町・西桂町、南は富士吉田市・南都留郡忍野村・中山湖村、北は大月市に接している。都留市の大部分は御坂山地と道志山塊による山間地が占め、桂川とその支流である鹿留川、杓子流川、大櫛川、菅野川、朝日川などによって形成された河岸段丘上の平坦面に市街地が展開している。桂川は中山湖を水源として、市内を南西から北東に流れており、大月市、上野原市を通過したのち、相模川と名前を変え、相模湾へ注いでいる。

三ノ側遺跡は桂川右岸の河岸段丘上の中央付近に立地しており、市域の中でも日照時間が長い箇所である。調査地点周辺は北東へ向かって地形が傾斜している。標高は約492mであり、隣接する平成23年度調査地点よりも若干下がった位置にある。旧校舎建設のために広い範囲が整地され、平坦面が作られているが、明治時代の地籍図には複数の区画が確認できることから、元の地形面は北に向かうにつれ、さらに下がっていくことが推測された。発掘地点から北へ約300m離れて桂川が流れおり、南側は道志山塊の御正体山から生出山へ尾根が伸びている。発掘地点から南側の山裾までの距離は250mほどである。また、寛永16年(1639)に完成した十日市場大堰(谷村大堰)から流れる家中川と寺川が、調査地点を南北に挟むように南西から北東方向へ流れている。

第2節 歴史的環境

三ノ側遺跡は東西約1,000m弱の範囲に分布すると推測される大規模な遺跡である。昭和56年度には、今回の調査地点から南西へ約250m離れた地点で都留市教育委員会による発掘調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴建物跡が発見されている。この調査では皇朝十二銭の和同開珎や富春神宝、銅製の小壺などが出土している。さらに都留市教育委員会による平成13・14年度、27・28年度の発掘調査、平成20年度、23・24年度の試掘調査でも、奈良・平安時代の遺構や遺物が発見された。また、今回の調査地点の南西側に隣接する、平成23(2011)年度の山梨県埋蔵文化財センターによる発掘調査では奈良・平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が複数確認され、この一帯が集落跡であったことが明らかとなった。

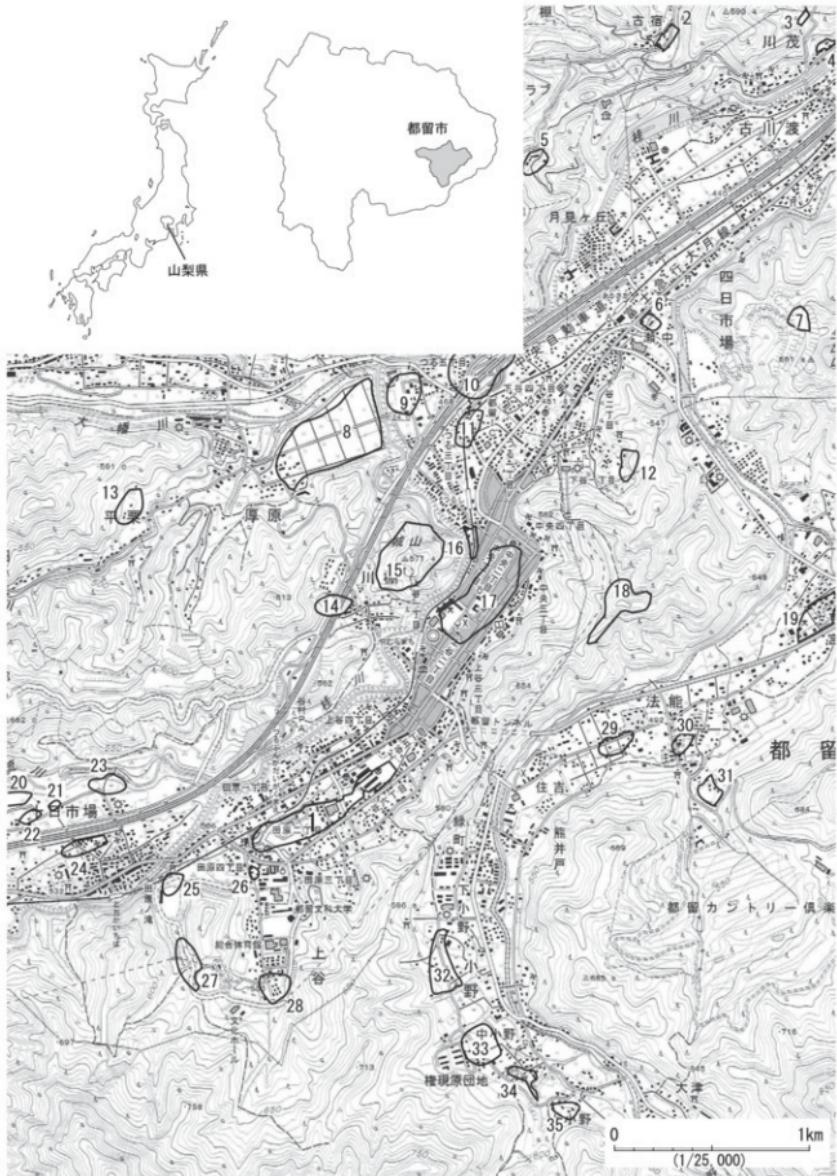
三ノ側遺跡の周辺には、縄文時代～中世の遺跡が存在し、集落遺跡の多くは、桂川やその支流沿いに発達した河岸段丘上に立地している。第1図は三ノ側遺跡を中心とした遺跡分布図であり、以下文中○内の数字と、第2表の番号は、第1図中の番号に対応する。

市域にある旧石器時代の著名な遺跡として一杯窪遺跡が挙げられるが、三ノ側遺跡周辺に旧石器時代遺跡は確認されていない。

縄文時代では、縄文時代早期の炉穴群が発見された玉川金山遺跡(平成16～19年度調査)、生出山山頂遺跡(7、昭和52年度調査)、縄文時代前期後半から中期後半の竪穴建物跡が発見された美通遺跡(平成20～23・27年度調査)、縄文時代中期末の大環状配石遺構が発見された牛石遺跡(8、昭和54年度調査)などがある。三ノ側遺跡周辺では、1.5kmほど西にあたる十日市場地区に縄文時代の遺跡散布地が散見される(20～25)。

弥生時代では、玉川金山遺跡、生出山山頂遺跡、美通遺跡、牛石遺跡、宮原遺跡(19、昭和59年度調査)などが認められる。都留市域では弥生時代中期以降、特に古墳時代を通じて遺跡がほとんど見られない状況にある。散布地ではあるが、古墳時代の遺跡として天神山遺跡(31)、十二割海戸遺跡(32)が知られる。

8世紀に入ると遺跡の数は再び増加し、奈良・平安時代には桂川沿いに大規模な遺跡が現れるようになる。三ノ側遺跡を含め、竪穴建物跡が発見された牛石遺跡や美通遺跡、畠に関わると想定される遺構が検出された鷹の巣遺跡(10、昭和55・57・58年度・平成18～22年度調査)、玉川金山遺跡、藏骨器が出土した



第1図 三ノ側遺跡と周辺遺跡位置図

九鬼Ⅱ遺跡（平成5年度調査）などがある。また、埋蔵文化財センターが平成17年度に発掘調査した四ノ側遺跡（26）は三ノ側遺跡に隣接する。三ノ側遺跡周辺は、古代甲斐国の大留郡多良郷にあたるとされ、三ノ側遺跡の立地する都留市田原の地名は「多良」に由来すると考えられている。

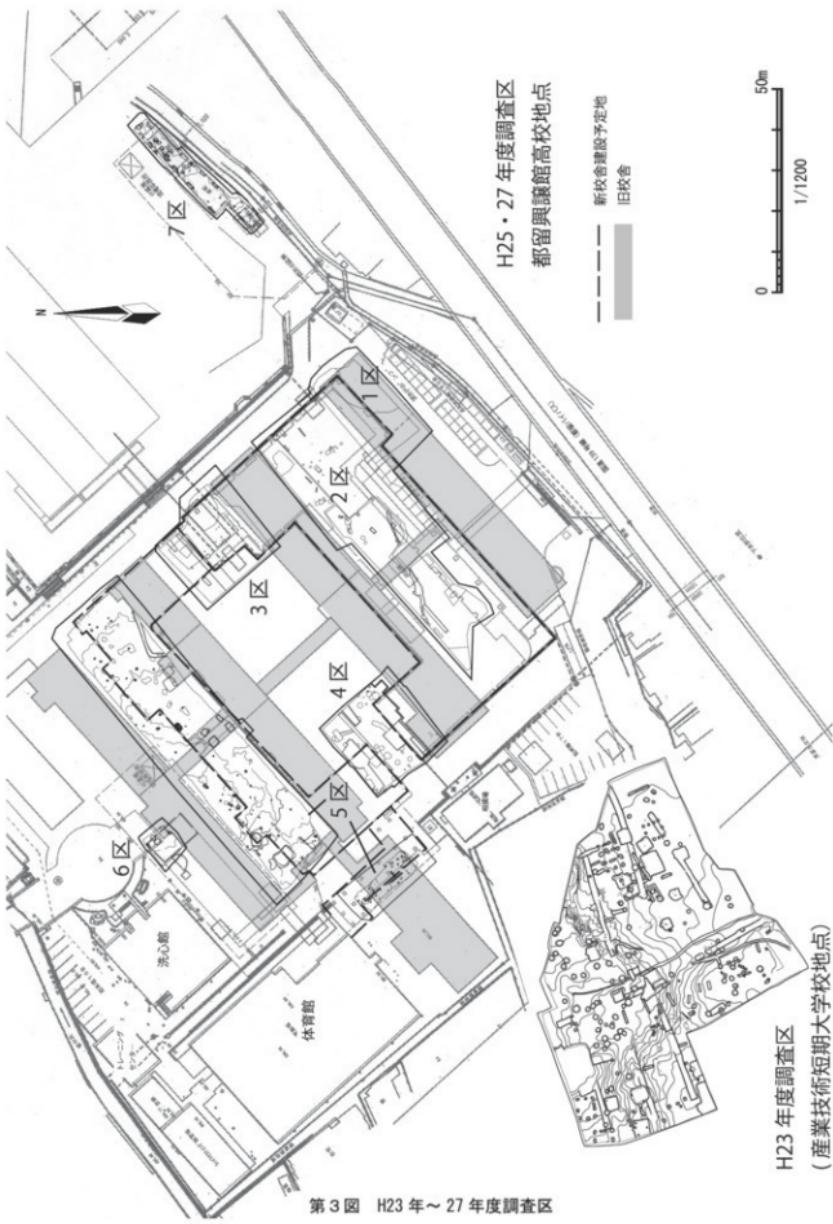
中世になると、小山田氏によって勝山城（15）や谷村城（17）が整備され、近世にかけて領主が変遷する。本報告地点から北東方向へ1.2km離れた地点では、平成26年度・27年度に当埋蔵文化財センターによりはじめて本格的に谷村城（谷村陣屋地点）の発掘調査が実施され、中世から近世・近代の遺構が地中に良好に保存されている状況が把握された。また、江戸時代初期の秋元氏治世下では、十日市場大壠の開削によって新田の開墾と石高の増加が図られた。三ノ側遺跡周辺は谷村城下町に近い水田地帯であったと推測される（山梨県埋蔵文化財センター 2013「第2章 遺跡の位置と環境 第2節 歴史的環境『三ノ側遺跡』より一部引用）。

第2表 三ノ側遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	三ノ側遺跡	集落跡	奈良・平安・中世・近世	19	宮原遺跡	散布地	縄文・弥生
2	古谷戸遺跡	散布地	縄文	20	御所海戸遺跡	散布地	縄文
3	掲久保遺跡	散布地	縄文	21	馬々舟遺跡	散布地	縄文
4	亀石遺跡	散布地	縄文	22	おいしがね遺跡	散布地	縄文
5	横吹遺跡	散布地	縄文	23	向原遺跡	散布地	縄文
6	山梨遺跡	散布地	縄文	24	下山梨遺跡	散布地	縄文
7	生田山山頂遺跡	集落跡	縄文・弥生・平安	25	大堰遺跡	散布地	縄文
8	牛石遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	26	四ノ側遺跡	集落跡	平安
9	道生崎遺跡	散布地	縄文・中世	27	八ツ沢遺跡	散布地	縄文
10	鷹の巣遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	28	山ノ神遺跡	散布地	縄文
11	徳重遺跡	散布地	縄文	29	住吉遺跡	集落跡	縄文
12	深田遺跡	散布地	縄文・古墳	30	海戸遺跡	散布地	縄文
13	上ノ山遺跡	散布地	縄文	31	天神山遺跡	散布地	古墳
14	正綱寺遺跡	散布地	縄文	32	十二割海戸遺跡	散布地	古墳・奈良・平安
15	勝山城跡（お茶壺藏）	城館跡	中世・近世	33	権現原遺跡	散布地	縄文・平安
16	城の腰遺跡	散布地	弥生・古墳	34	小野浜沢遺跡	散布地	縄文・平安
17	谷村城	城館跡	中世・近世	35	上小野遺跡	散布地	縄文・平安
18	谷村の烽火台	城館跡	中世				



第2図 三ノ側遺跡周辺詳細図 (S=1/10000)



第3図 H23年～27年度調査区

第3章 調査の方法および基本層序

第1節 発掘調査の方法

発掘調査は都留興譲館高等学校建設事業の工事工程にあわせて、合計で7つの調査区に分けて実施した。第1期調査では1～4区を、第2期調査では5～7区を調査している。5区の調査については、古代～中近世の面より下層にも、安定した遺構面が存在したため、古代～中近世の面を第1面、古代以前の遺構面を第2面として調査をした。第2面の調査の際は、調査区を半分に反転しながら調査を行った。

表土層の除去は重機により行った。事前の試掘調査で確認されていた遺物包含層の直上まで重機掘削を行い、その後は人力で精査を行った。

確認された遺構については、土層観察用のベルトを設けるか、半裁して確認しながら発掘した。各遺構は平面図、土層断面図などを作成し、出土遺物の位置を記録した。また、出土した遺物については、微細なものを除いて、トータルステーションを用いて位置の記録を取った。調査の進捗状況および発見された遺構や遺物の確認状況、遺跡の全景は、小型一眼レフカメラやデジタルカメラで撮影し、記録した。

第2節 基本層序

本調査地点の現地形は旧校舎建設のため平坦面が形成されているが、北方向へ向かうにしたがって土地区画（地籍）単位で下がっていくことが予想された。同一区画内ではほぼ平坦であるが、区画の境付近では傾斜が確認されている（第8図2区深掘りセクション）。以下に各調査区の堆積状況を記載していく。なお、本文中の土層の番号は、各図に対応しているものであり、全体に共通するものではない。

(1) 1区

搅乱の下は猿橋溶岩であり、安定した遺構面となりうる土層は確認されなかった。

(2) 2区（第5～8図）

2区では搅乱層の下に水田耕作土が確認されている（1a～1d層）。谷村工業高校開校以前は水田が広がっていたと思われる。水田がどの時期まで遡るかは不明である。

その下には、スコリアを含む土層が複数確認できる。この土層は箇所によって堆積状況が異なっており、水性堆積などの二次的な影響を受けた可能性が考えられる。また、さらに下層には黄褐色土層が確認された。1溝の検出状況から、平安時代の遺構確認面と思われるが、非常に限定的で、場所によっては確認できなかつた。

(3) 3区（第9図）

3区では搅乱層の下に水田耕作土が確認されている。その下は、スコリア層を含む土層が複数確認されたが、2区と直接対比できない層も多く、平安時代の遺構面の可能性がある黄褐色土層も確認できなかった。いわゆる平安時代の土層は水田耕作によって失われている可能性が高く、4b層は平安時代の土器を包含するが二次堆積層と考えられる。7層以下は縄文時代の土層であると想定される。

(4) 4区（第10図）

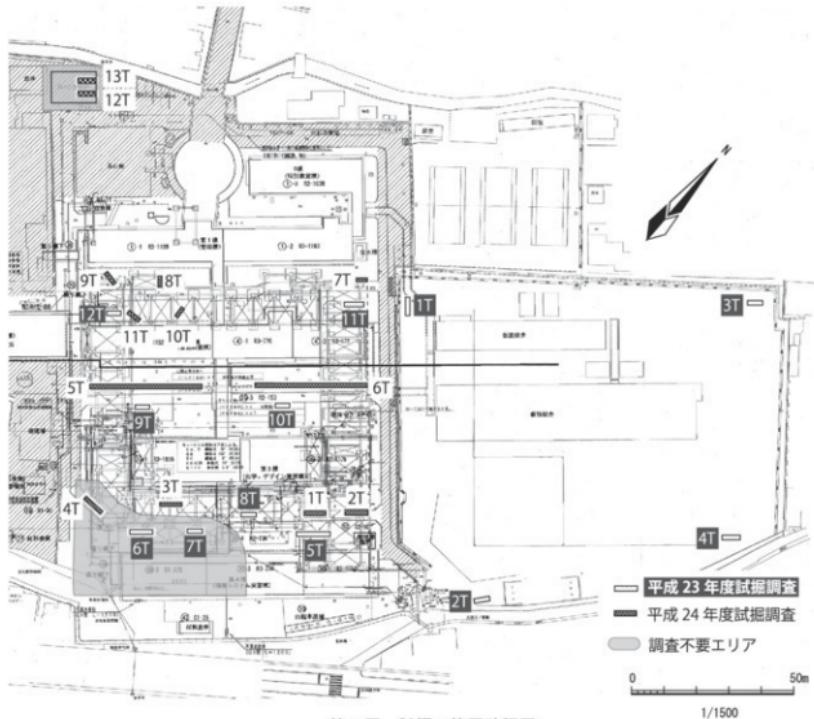
4区では、搅乱の下はスコリアを含む土層となり、水田耕作土は確認されなかった。2層の黄褐色土層は2区で確認された平安時代の遺構確認面と考えられる。平安時代の生活面はこれより上位であり、後世の搅乱によって失われている。3層以下は縄文時代の土層であると考えられる。

(5) 5区・6区(第11～13図)

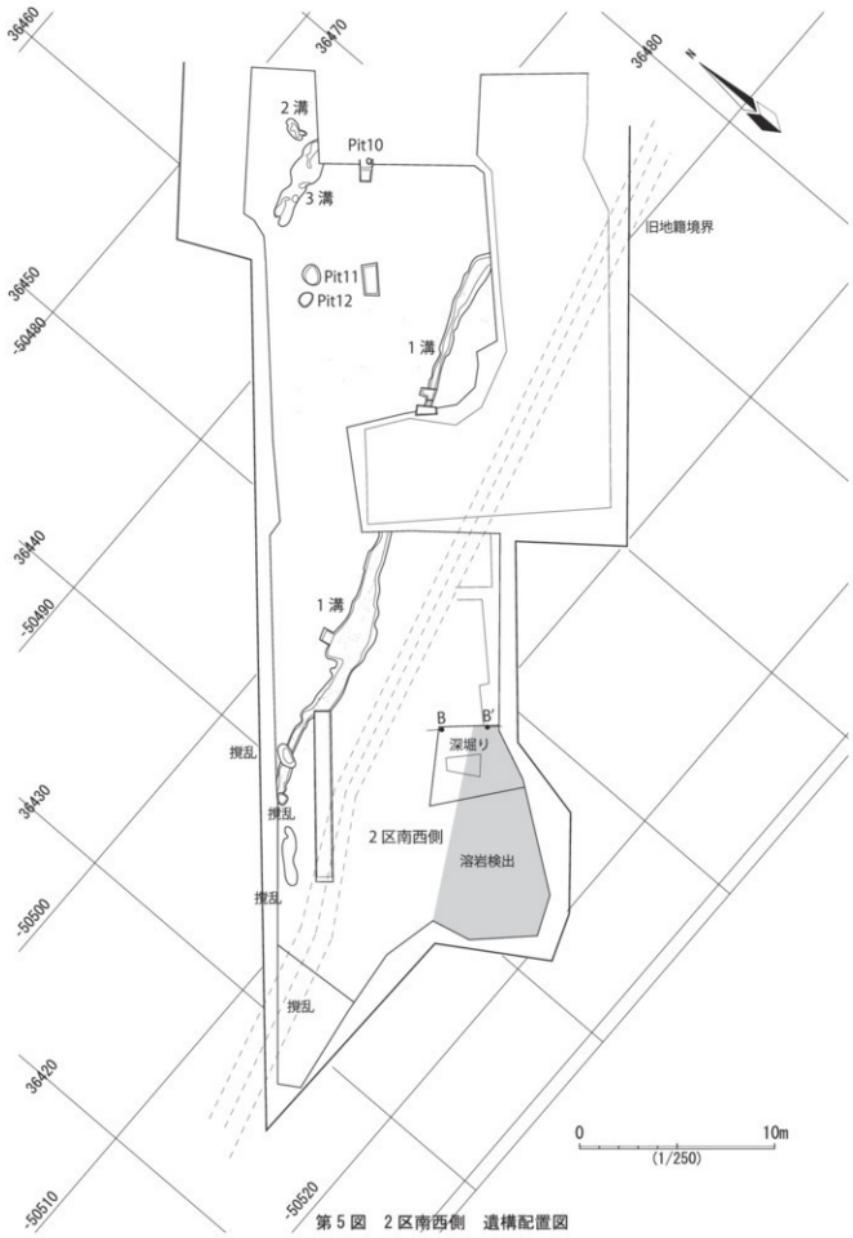
鉗床層(またはそれに相応)下層の黄灰色土層が中近世の遺構の確認面となる(3b層)。本地点は古代から連続的な土地利用が行われており、10～20cmほど堆積する中近世の遺構確認面を掘り下げると、にぶい黄褐色の奈良・平安時代の遺構確認面が確認される(4層)。平成27年度の調査では、3b層上面で明確な遺構が見つかった場合を除いて、4層上面で遺構精査を行った。5層～7層はスコリアを多く含む層だが、8層で炭化物を微量に含む安定した黒色土となり、9・10層でにぶい黄橙色土層となることから、第2面として10層上面で遺構精査を行った。なお、第2面の遺構の時期は、縄文時代前期ころまでさかのぼる可能性がある(第5章自然科学分析参照)。

(6) 7区(第14・15図)

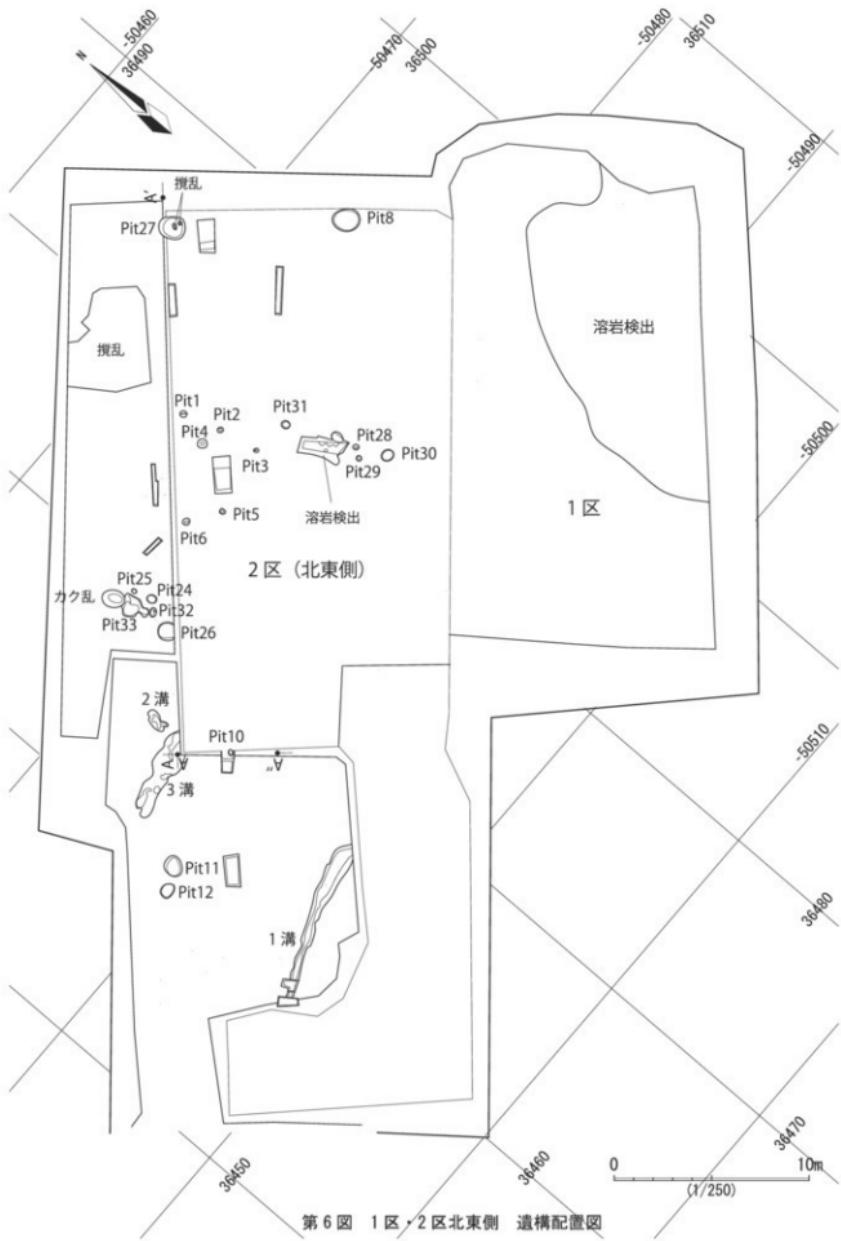
今回の調査区のなかで、比較的搅乱が及んでいない地点であり、古代以降の堆積土層が良好に残存している。古代の遺物包含層(10層)及び確認面(11層)は、調査区の西側から東側にかけて下るように傾斜している。グラウンド造成時に、西側では切土をし、東側では厚く盛土をしていると思われる。5区で確認された第2面に相当する層は確認されず、溶岩礫を多く含む土層がトレンチ下層で確認されたため、7区では古代の遺構確認面のみ調査を実施した。



第4図 試掘・範囲確認図

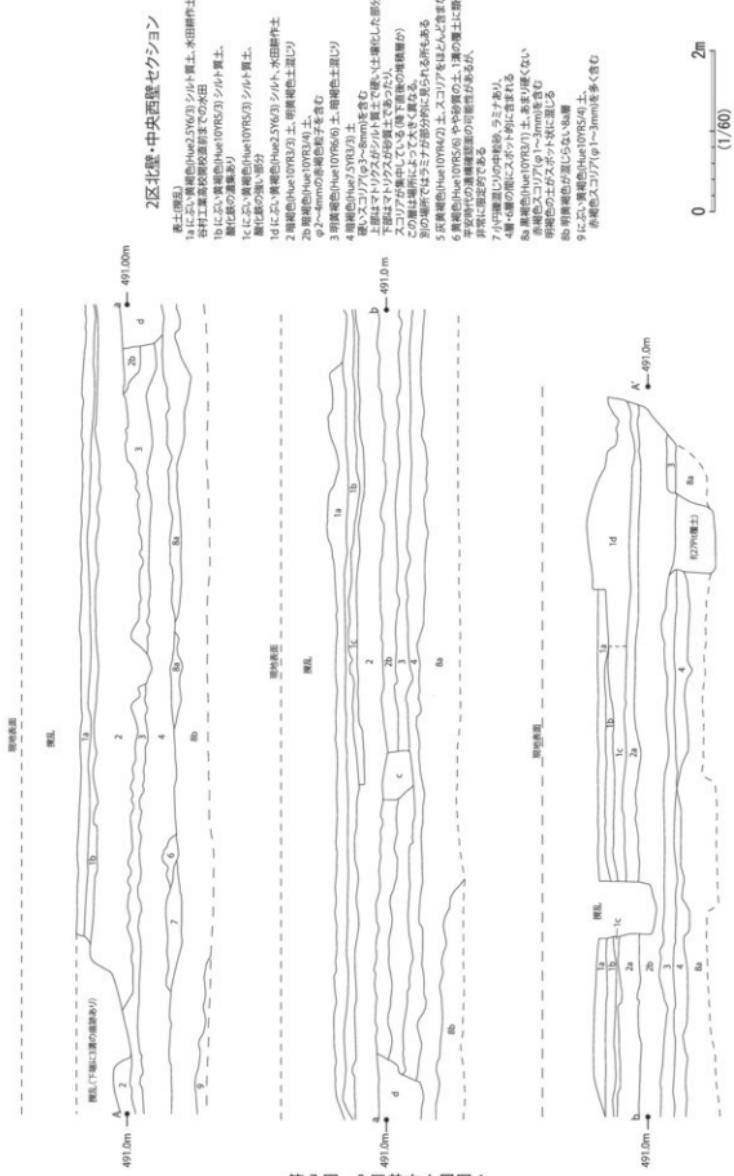


第5図 2区南西侧 遺構配置図



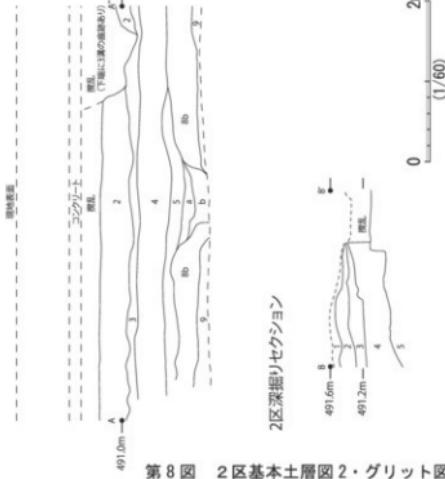
第6図 1区・2区北東側 遺構配置図

2区北壁セクション



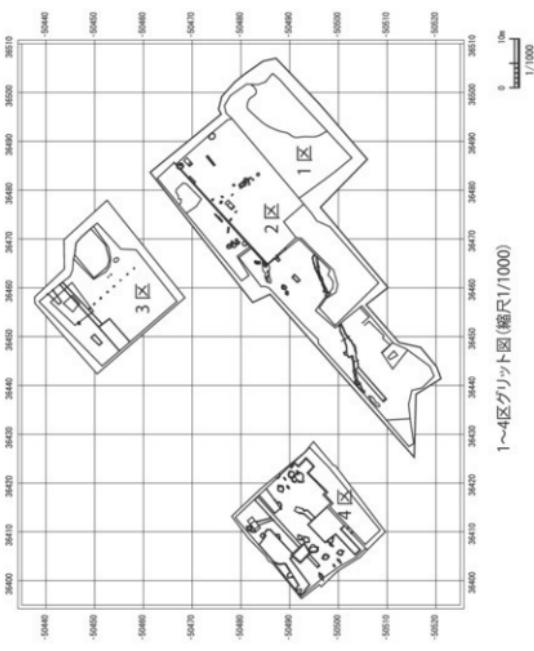
第7図 2区基本土層図1

2区中央西壁セクション

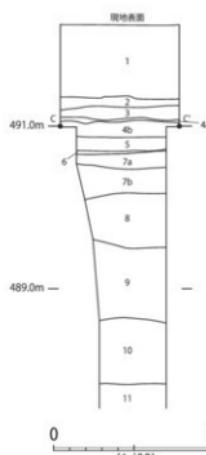
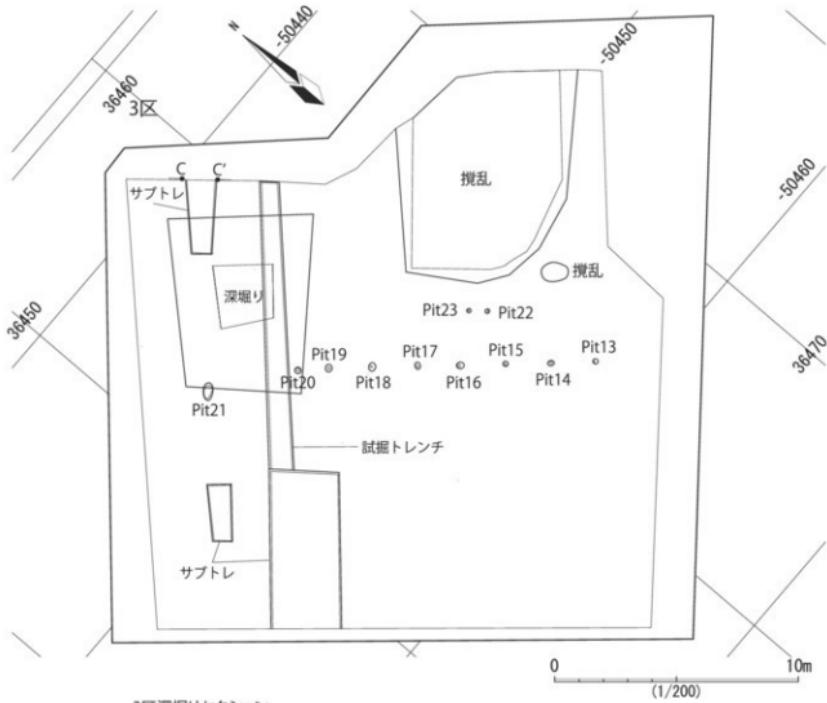


第8図 2区基本土層図2・グリット図

2区深掘りセクション

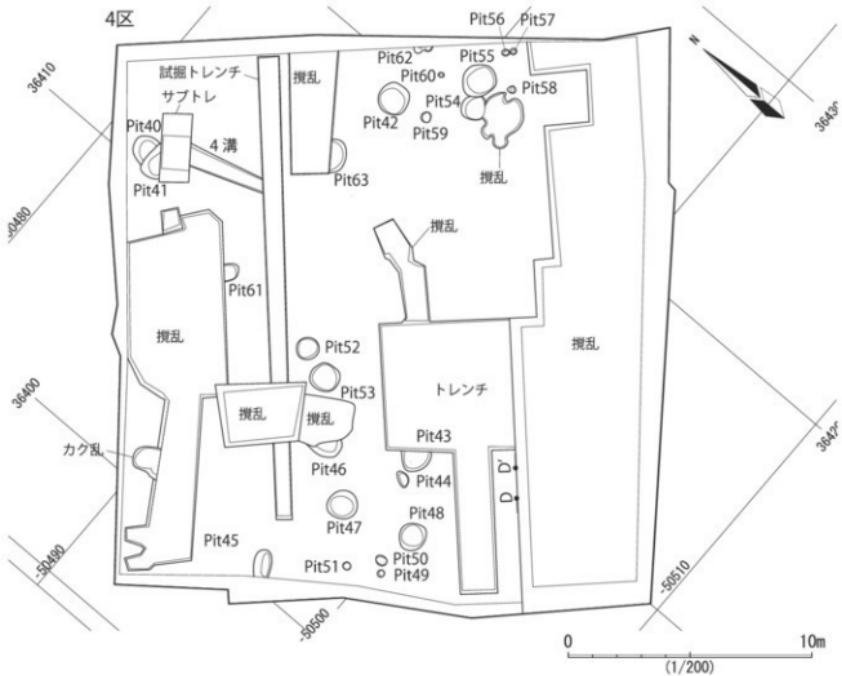


- 1 黒褐色粘土 (0Y82/2) 土、硬くしまりが無い、赤褐色粒子（0.2~5mm）を多く含む。
- 2 褐褐色粘土 (0Y83/3) 土、やや（せや）けりしている、赤褐色の土（0.2~5mm）を多く含む。
- 3 褐褐色粘土 (0Y83/4) 土、硬く（せう）けりている、赤褐色粒子（0.2~5mm）を多く含む。
- 4 黑褐色粘土 (0Y84/1) 土、硬く（せう）けり、基調（きとう）は灰白色（0.2~5mm）の土。
- 5 黑褐色粘土 (0Y84/2) 土、硬い、基調（きとう）は灰白色（0.2~5mm）の土。
- 6 黑褐色砂岩（0.2~5mm）を多く含む、溶岩（ゆうがん）は、表面（めんぱ）に灰じら色、溶岩は下層にいくにつれて大きくなり、人間大に近い大きさとなる。

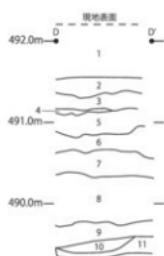


- 1 表土(撹乱)
- 2 黄褐色(Hue10YR5/2)シルト質土 酸化鉄の1~2mmの斑文わずかにあり
水田耕作土、谷村工業高校開校直前までの水田
- 3 にぶい黄褐色(Hue10YR4/3)シルト質土 2層よりシルト質分が少ない 水田耕作土
- 4a 黄色(Hue7.5YR4/3)土 酸化鉄の濃集層
- 4b 黄色(Hue10YR4/4)土 φ1~2mmの赤褐色のスコリアを含む
遺物包含層(平安時代の土器)
- 5 喙褐色(Hue10YR3/3)土 にぶい黄褐色シルト質土が混入する
かづらの程度は低いが耕作土か
- 6 喙褐色(Hue10YR3/3)土 φ1~2mmの橙色スコリアを多く含む
- 7a 黒色(Hue10YR2/1)土 φ2~3mmの橙色スコリアを含む 感触がザラザラしている
- 7b 黒色(Hue10YR2/1)土 φ2~4mmの橙色スコリアを含む 7a層よりもスコリアが多く、
感触がガリガリしている
- 8 黒色(Hue10R1.7/1)土 φ2~4mmの橙色スコリアを含む 7a層よりもスコリアが少ない
- 9 喙褐色土 φ4~16mmの黄褐色スコリアを多く含む スコリアの色調は
赤色~黄褐色、また灰色と変化に富む 大きさも最大のものはφ50mmとなる
ラミナが見られ、スコリアは円錐状であることから、水に運ばれた再堆積層と考えられる
- 11 猫橋溶岩

第9図 3区 遺構配置図・基本土層図



4区深掘りセクション



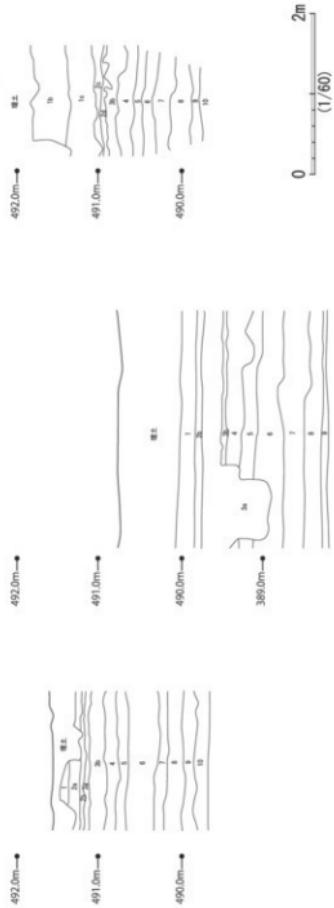
- 1 土表
 2 黄褐色(Hue10YR5/6)土 平安時代の遺構確認面
 平安期の生活面はこれよりも上位
 3 黒褐色(Hue10YR3/2)土 $\varphi 1\sim2mm$ の赤褐色のスコリアを多く含む
 2層との境は凹凸があり、漸移的に変化している
 4a 暗褐色(Hue10YR3/3)- 黃褐色のスコリア($\varphi 2\sim4mm$)層
 4b 黒褐色(Hue10YR3/1)シルト ラミナが認められる
 4c にぶい 黄褐色(Hue10YR7/4)シルト ラミナが認められる
 4層は～までがスポット的に入り込むが4区の中でも確認できる箇所が少ない
 5 黑褐色(Hue10YR3/2)土 黒褐色スコリア($\varphi 3\sim6mm$)、黄褐色スコリア($\varphi 1\sim3mm$)を含む
 6 黑褐色(Hue10YR2/1)土 赤褐色スコリア($\varphi 1\sim6mm$)、黒褐色スコリア($\varphi 1\sim6mm$)を多く含む
 カリカリとしている 織文期か
 7 塗褐色(Hue10YR3/3)土 暗褐色スコリア($\varphi 4\sim6mm$)、黄褐色スコリア($\varphi 1\sim2mm$)を多く含む
 8 黒色(Hue10YR2/1)土混じりの黒色スコリア層($\varphi 2\sim10mm$) スコリアは風化しており、削るとガタガタする
 9 黒色(Hue10YR2/1)土 褐色スコリアを少量含む 褐色(Hue10YR4/4)土を塊状($\varphi 30\sim100mm$)に含む
 10 黒色(Hue10YR2/1)土 スコリア($\varphi 2\sim6mm$)を含む
 部分的な層であり、4区の中でも確認できない箇所がある
 11 暗褐色(Hue10YR3/3)土 赤褐色スコリア($\varphi 1\sim2mm$)を含む 滲岩($\varphi 200mm$ 以上)を含む
 滲岩を埋めている層
 12 黒色(Hue10YR2/1)土混じりの黒色・赤褐色スコリア層($\varphi 3\sim10mm$)
 滲岩($\varphi 200mm$ 以上)を含む 部分的な層であり、4区のなかでも確認できる場所が少ない
 滲岩を埋めているのは基本的に11層であり、部分的に12層が存在し、滲岩を埋めているようである

0 2m
 (1/60)

第10図 4区 遺構配置図・基本土層図

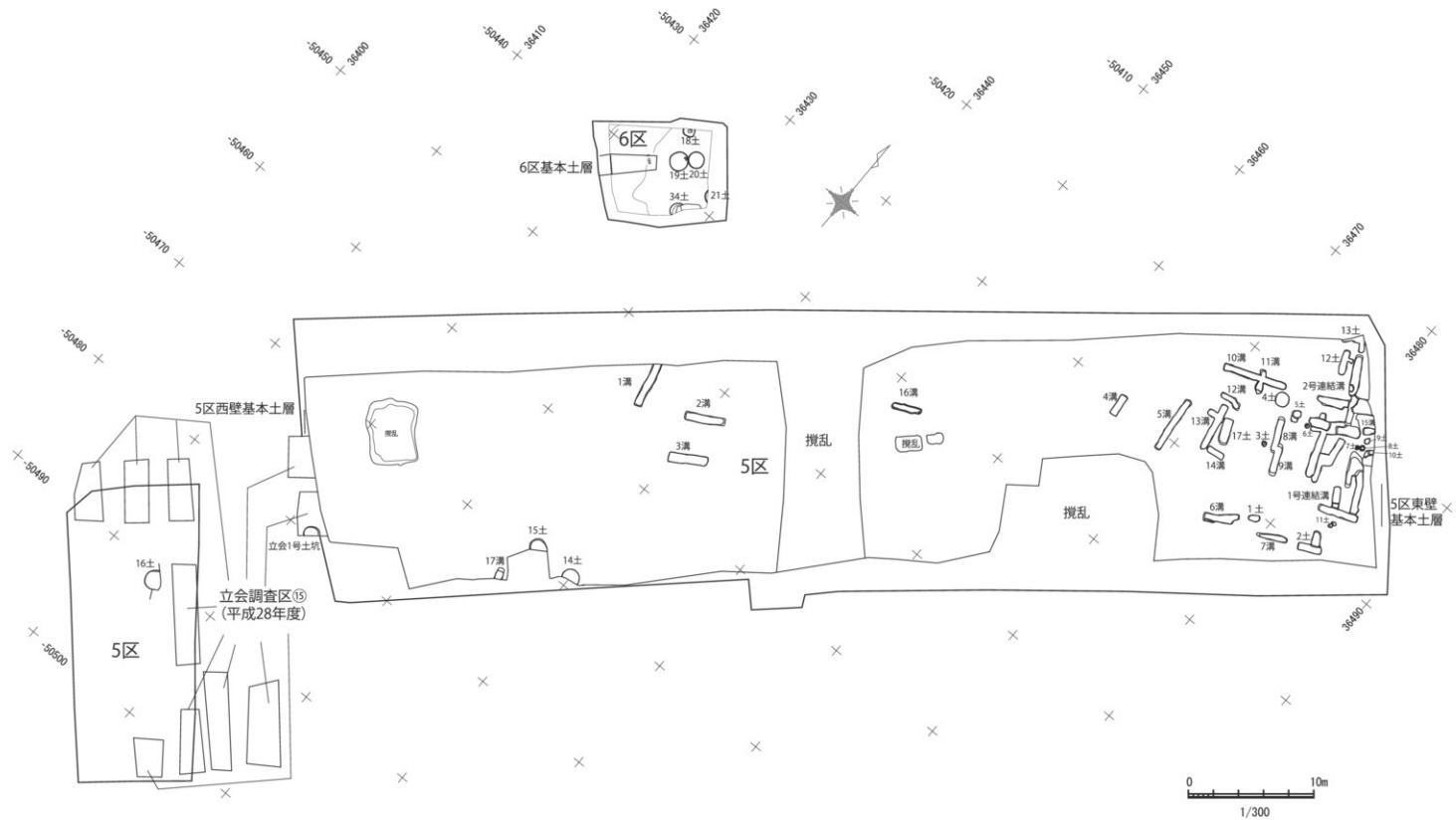
5区西壁基本土層

6区東壁基本土層

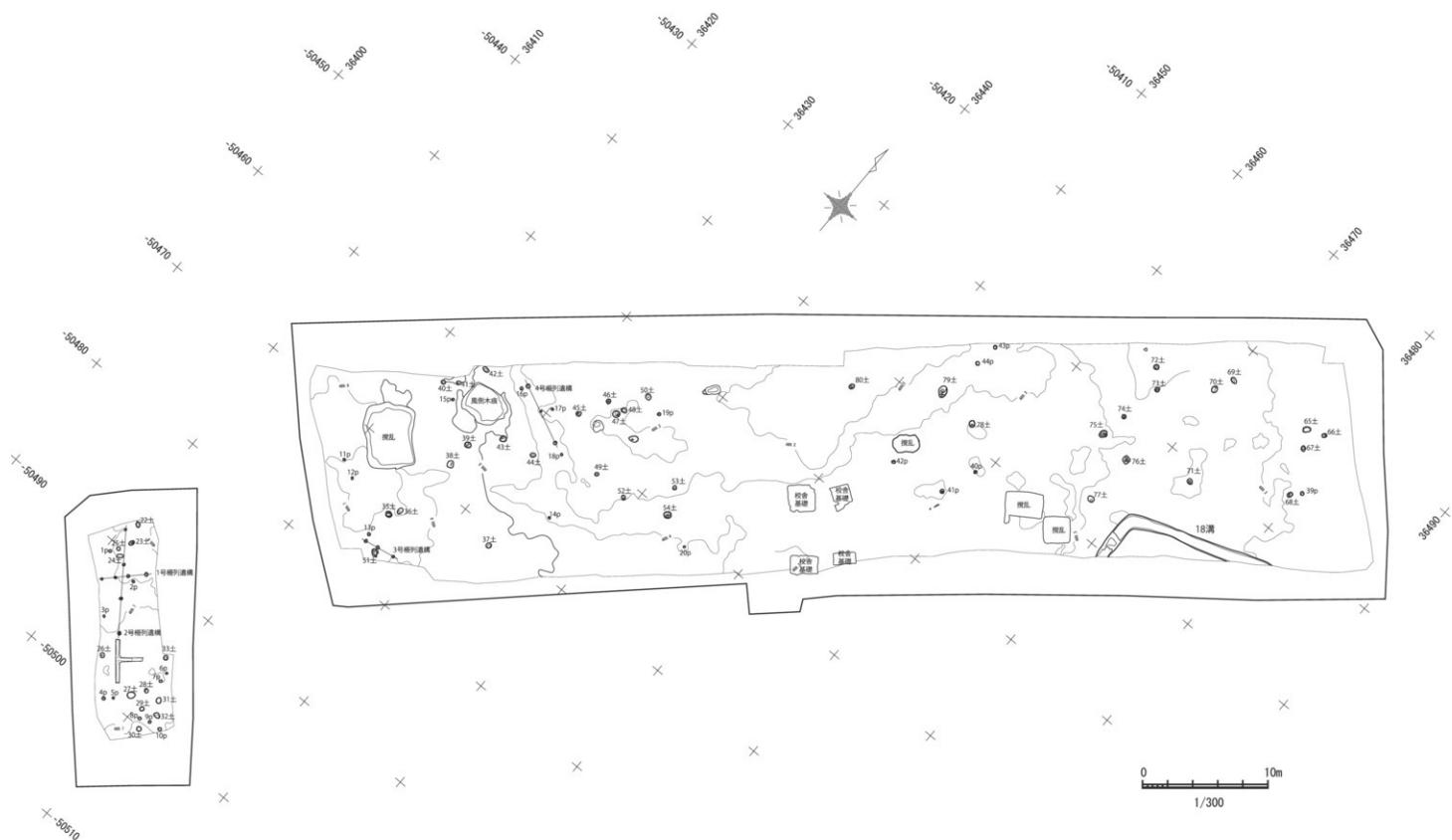


第11図 5区・6区基本土層図

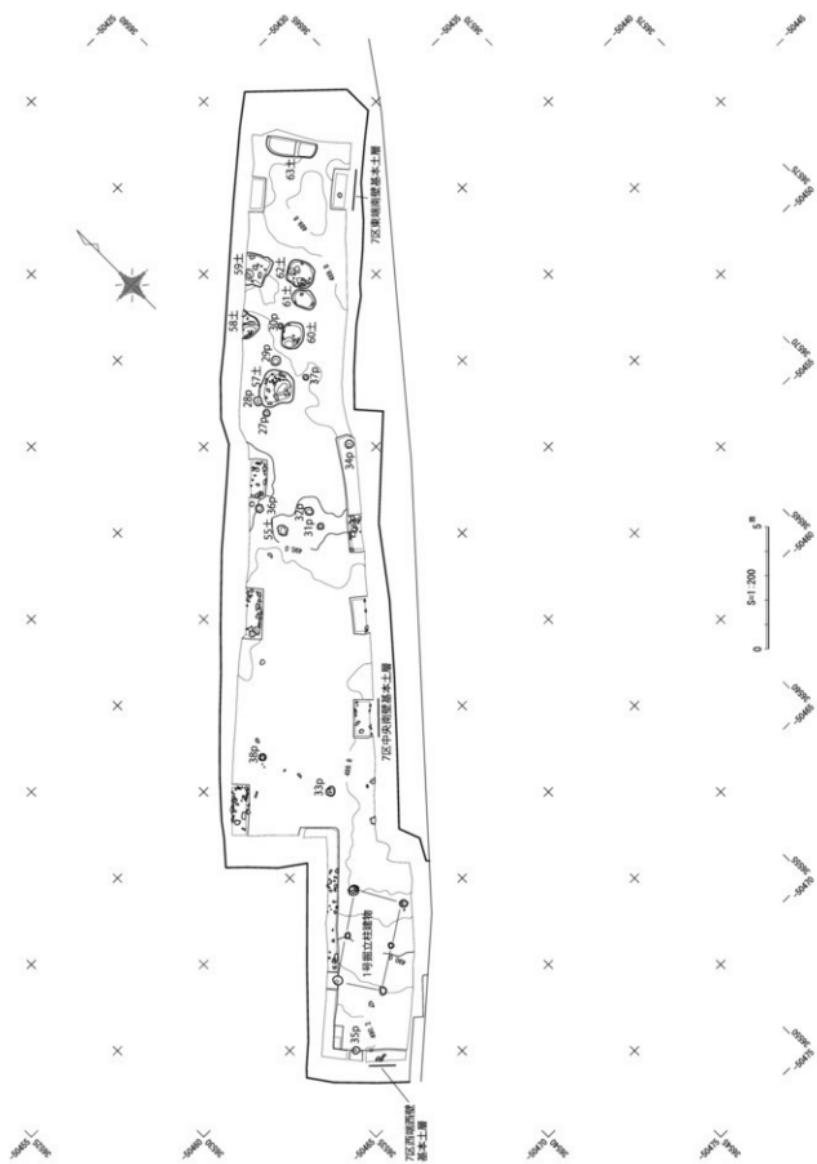
- 1a 黄褐色(Hue2.5/SV3)土 しゃりなし、粘性弱 の2m以下褐色スコリア1% 溶化物を含む 近代以降
に高い黒褐色(Hue10/VG5/3)土 しゃりなし、粘性なし、部分的に砂礫層が形成される
- 1b 黄褐色(Hue10/VG5/3)土 しゃりなし、粘性なし、(粘性弱)の2m以下褐色スコリア7% 黃褐色5%
- 1c 灰褐色(Hue10/VG2)土 しゃりなし、粘性弱 の5cm以下下層を含む
- 2a 黄褐色(Hue2.5/SV5/6)土 しゃりなし、粘性弱 の2m以下褐色スコリア2% φ5mm以下黒色スコリア2%
- 2b 極灰褐色(Hue2.5/VG4/1)土 しゃりあり、粘性弱 φ2mm以下褐色スコリア20% φ5mm以下褐色スコリア2% 黄褐色7%を含む
- 2c 灰黃褐色(Hue10/RG2)土 しゃりなし、粘性弱 φ2m以下下層褐色スコリア7% 岩塊をわずかに含む
- 2d 灰褐色(Hue2.5/VG5/4)土 しゃりなし、粘性弱 φ2m以下褐色スコリア10% 黄褐色5%
- 3a 黄灰色(Hue2.5/VG4/1)土 しゃりあり、粘性弱 φ2m以下褐色スコリア10% φ5mm以下褐色スコリア2%
- 3b 黄灰色(Hue2.5/VG4/1)土 しゃりなし、粘性弱 φ2m以下褐色スコリア7% φ5mm程度褐色スコリア 3%を含む 古代の遺跡包含層で、中世の遺跡の構成層
- 4 に高い黒褐色(Hue10/VG5/3)土 しゃりなし、粘性なし φ5mm以下褐色スコリア3% φ5-10mm黒色スコリア10%を含む 古代の遺跡包含層
- 5 黄褐色(Hue2.5/VG3/1)土 しゃり弱 粘性なし φ2mm以下褐色スコリア10% φ3-10mm黒色スコリア20%を含む
- 6 黄褐色(Hue2.5/VG4/1)土 しゃり弱 粘性強 φ2m以下褐色スコリア10% φ2mm黒色スコリ亞30%を含む ブルコリヤ濃度が増加する
- 7 灰褐色(Hue10/VG4/1)土 しゃりあり 粘性弱 φ2mm以下褐色スコリア15% φ5-10mm黒色スコリ亞2%
- 8 灰褐色(Hue10/VG4/1)土 しゃりあり 粘性強 φ2mm以下褐色スコリア2% φ5-10mm黒色スコリ亞2%
- 9 灰褐色(Hue2.5/SV5/2)土 しゃり弱 粘性弱 φ2-5mm褐色スコリア7% φ5mm以下褐色スコリア10%を含む 清水層
- 10 に高い黒褐色(Hue10/RG4)土 しゃりあり 粘性なし φ2-5mm以下褐色スコリア10% φ5-10mm黒色スコリ亞2% φ2-10mm褐色スコリア7%を含む 8mm以下褐色スコリ亞7%を含む



第12図 5区・6区 第1面遺構配置図



第13図 5区 第2面遺構配置図



第14図 7区遺構配置図

7区西端西壁基本土層

7区中央南壁基本土層

7区東端南壁基本土層



第15図 7区基本土層図

第4章 発掘された遺構と遺物

第1節 第1期調査

(1) 1区

擾乱層を掘り下げるとき猿橋溶岩が検出される。遺構や遺物は確認されなかった。

(2) 2区 (第16・17図、遺物第22図)

(i) 遺構

4条の溝状遺構と57基のピットが検出された。平安時代の遺物が多く出土した1号溝状遺構以外の大半の遺構は時期不明であるが、ほとんどは近世以降と推測される。

・1号溝状遺構 (第14図)

北東から南西にかけて、ほぼ直線上に伸びている。検出された長さは調査区西端から東端まで29.65mだが、旧校舎の渡り廊下の基礎が遺構面まで達しており、中央部分が約6.8m失われている。深さは最大で0.24mだが、現状の遺構確認面は掘り込み面ではなく、実際の深度は不明である。1号溝状遺構は旧地籍の地割りに沿っており、遺構構築時期に同様の土地区画であった可能性がある。

遺物は土師器環の破片が多く出土しているが、微細な資料が大半である。また摩耗している資料が多いことから、遺物は水の影響を受けて流れ込んだと考えられる。遺物1～5は土師器環である。1～3は口縁部片、4・5は底部片である。1は玉縁、2・3は口縁部がやや外側に屈曲する丸縁である。すべてロクロア形であり、内外面がきれいにナデ調整されている。3は成形が十分でないため、口縁部に段差が残っている。4・5はやや摩耗が強く判然としないが、底面に回転糸切り痕は確認できず、ヘラ削りが行われている。4は内面に放射状暗文が施されているが、みこみ部には認められない。6は甕の口縁部である。これらは9世紀代の資料と推測される。

・26Pit

長径0.96m、短径0.94mの平面形状円形のピットである。現状の遺構確認面は掘り込み面ではなく、実際の深度は不明である。帰属時期も判然としない。

覆土から1点の遺物が出土している。遺物7は土師器の甕の口縁部である。流れ込みと推測される。

(ii) 遺構外遺物

遺構外から出土した遺物について8点を図示した。遺物の大半は土師器環の破片であったが、一部に甕も含まれていた（微細な資料のため図示なし）。また、わずかに陶器も出土した。出土した資料は時期が多岐にわたっており、流れ込みや二次堆積による資料もあると考えられる。

遺物8～13は全て甲斐型環の破片である。8・9・11・12・13は口縁部片、10は底部片である。8・9は口縁が尖形で、11～13は丸みを帯びる。いずれも8世紀末葉から10世紀前半に収まる。遺物14・15は陶器で、いずれも甕の胴部である。14は常滑産の甕の破片である。15は内外面に緑釉が施されている。中世の資料と推測される。

(3) 3区 (第18図、遺物第22図)

(i) 遺構

11基のピットが検出された。遺構の多くは時期不明であるが、近世以降のものが大半と推測される。Pit13～20は覆土からコンクリート塊・杭の一部が確認されており、以前（近代）の校舎に関わる杭列と考えられる。

(ii) 遺構外遺物

遺構外から出土した遺物について 5 点を図示した。遺物の大半は土師器の破片であったが、一部に陶器も含まれていた。出土した資料は時期が多岐にわたっており、流れ込みや二次堆積による資料と考えられる。

遺物 16 ~ 18 は全て土師器杯の底部片である。16 は全面底部ヘラ削りを行っており、9世紀後半~10世紀中葉の資料と推測される。17 は削り調整高台を有している。みこみ部と内面の傾斜変換点が、高台よりも内側に確認されており、9世紀の資料と推測される。18 は高台を有し、底部糸切り痕が未調整のまま残っていることから、10世紀後半~11世紀の資料と考えられる。遺物 19 は須恵器甕の脚部の破片である。外面はタタキが施されている。20 は陶器で、碗の底部である。内外面に灰釉が施されている。

また、馬の歯が一点出土した（巻末写真 8 に掲載）。旧校舎のトイレが位置していた地点から確認された。撓乱層と地山層との境付近から出土しており、原位置を保っているかは不明である。ただし、比較的若い馬（4歳程度）であり、奈良・平安時代まで遡る可能性がある。

(4) 4 区（第 17 ~ 19 図）

(i) 遺構

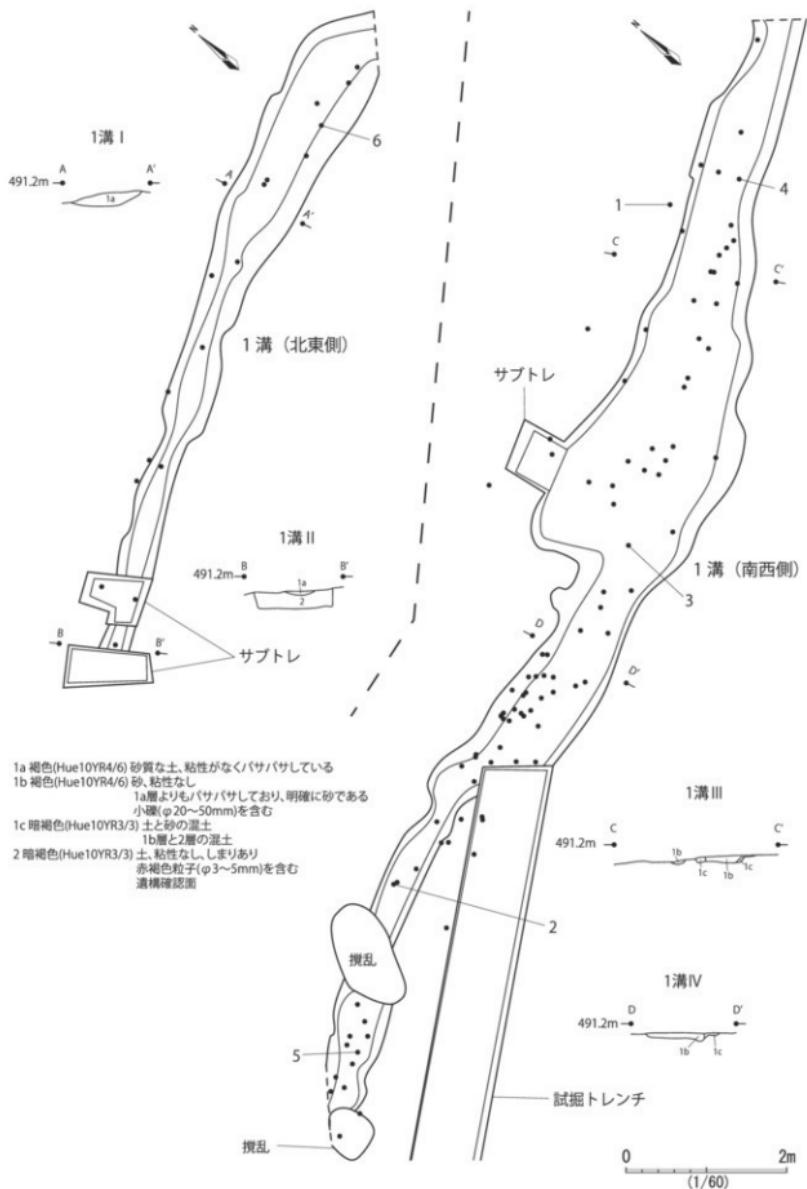
24 基のピットが検出された。遺構の多くは時期不明であるが、近世以降のものが大半と推測される。直径 1.0 ~ 1.4m ほどの円形の平面形状となるものが大半を占め、中でも直径 1.3m 前後のものが多く見られる。

第3表 第1期調査 ピット一覧表

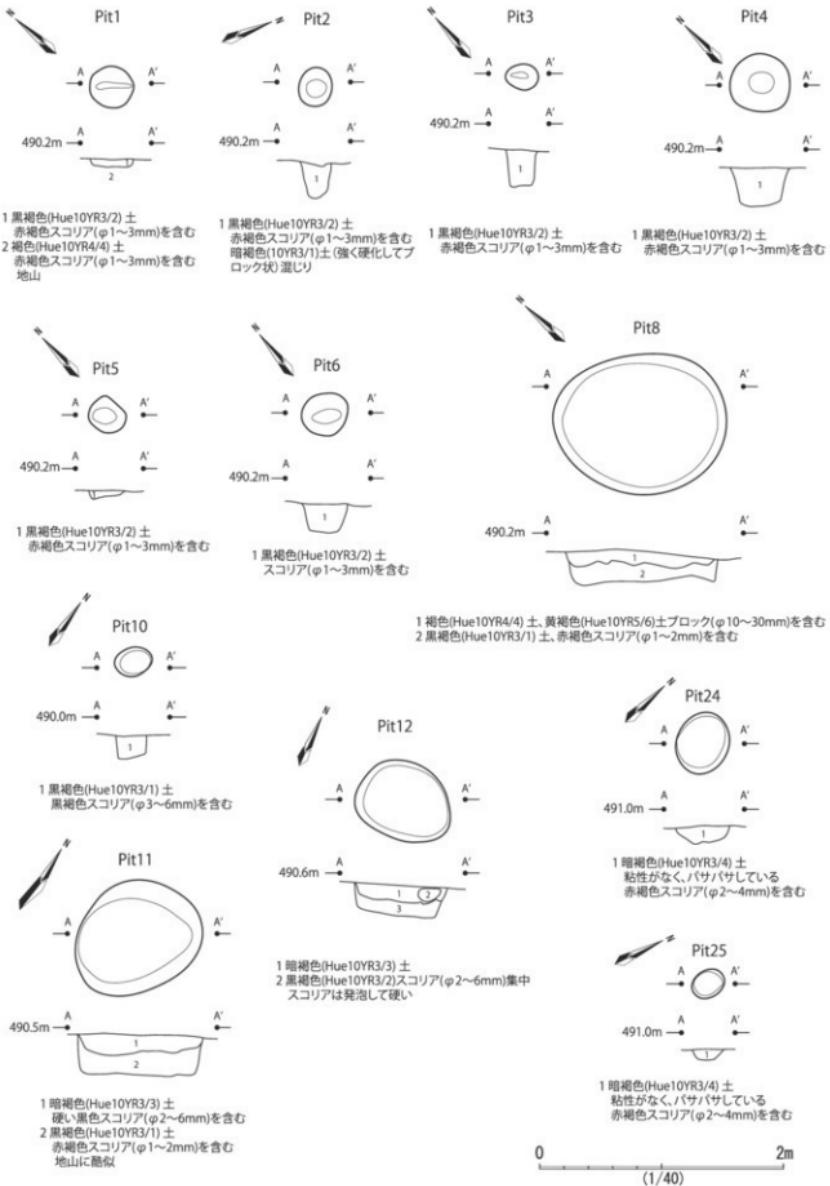
遺構名	図版	調査区	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
pit1	第17図	2区	0.40	0.36	0.05	
pit2			0.54	0.30	0.28	
pit3			0.26	0.20	0.28	
pit4			0.50	0.46	0.32	
pit5			0.34	0.30	0.05	
pit6			0.40	0.38	0.24	
pit7			欠番	欠番	欠番	沿辺の隆起跡
pit8	第17図	2区	1.42	1.20	0.29	
pit9	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番	
pit10	第17図	2区	0.34	0.30	0.20	
pit11			1.40	0.94	0.36	
pit12			0.76	0.70	0.24	
pit13			0.22	0.20	-	
pit14	第18図	3区	0.26	0.22	(0.20)	
pit15	-		0.22	0.20	-	
pit16	-		0.32	0.28	-	
pit17	-		0.30	0.24	0.50	
pit18	第18図		0.32	0.28	(0.30)	
pit19	-		0.32	0.26	0.50	
pit20	-		0.28	0.26	-	
pit21	第18図	2区	0.70	0.42	0.12	
pit22	-		0.20	0.18	0.18	
pit23	-		0.18	0.16	-	
pit24	第17図		0.54	0.46	0.12	
pit25	-		0.26	0.24	0.10	
pit26	-		0.96	(0.94)	-	
pit27	-		1.38	1.10	-	
pit28	-	4区	0.34	0.30	-	
pit29	-		0.30	0.28	-	
pit30	-		0.64	0.60	-	
pit31	-		0.44	0.40	-	
pit32	-		0.48	0.36	-	
pit33	-		1.48	1.06	-	
pit34	欠番		欠番	欠番	欠番	
pit35	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番	
pit36	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番	
pit37	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番	
pit38	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番	
pit39	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番	
pit40	第18図	2区	1.14	0.84	0.17	
pit41			1.20	0.84	0.16	
pit42			1.32	1.28	0.40	
pit43			1.24	(0.64)	0.20	
pit44			0.68	0.42	0.20	
pit45	第19図	4区	(1.12)	0.66	0.40	
pit46			1.76	1.50	0.32	
pit47			1.24	1.18	0.26	
pit48			1.14	1.06	0.24	
pit49			0.30	0.26	0.19	
pit50			0.46	0.40	0.08	
pit51			0.34	0.32	0.08	
pit52	第20図	4区	0.92	0.90	0.16	
pit53			1.26	1.20	0.20	
pit54			1.04	1.00	0.38	
pit55			1.42	1.38	0.43	
pit56			0.32	0.26	0.20	
pit57			0.28	0.26	0.25	
pit58			0.34	0.30	0.40	
pit59	第21図	4区	0.44	0.42	0.18	
pit60			0.28	0.20	0.23	
pit61			0.70	(0.36)	0.16	
pit62			0.92	(0.2)	0.35	
pit63			1.30	(0.6)	0.50	

第4表 第1期調査 溝一覧表

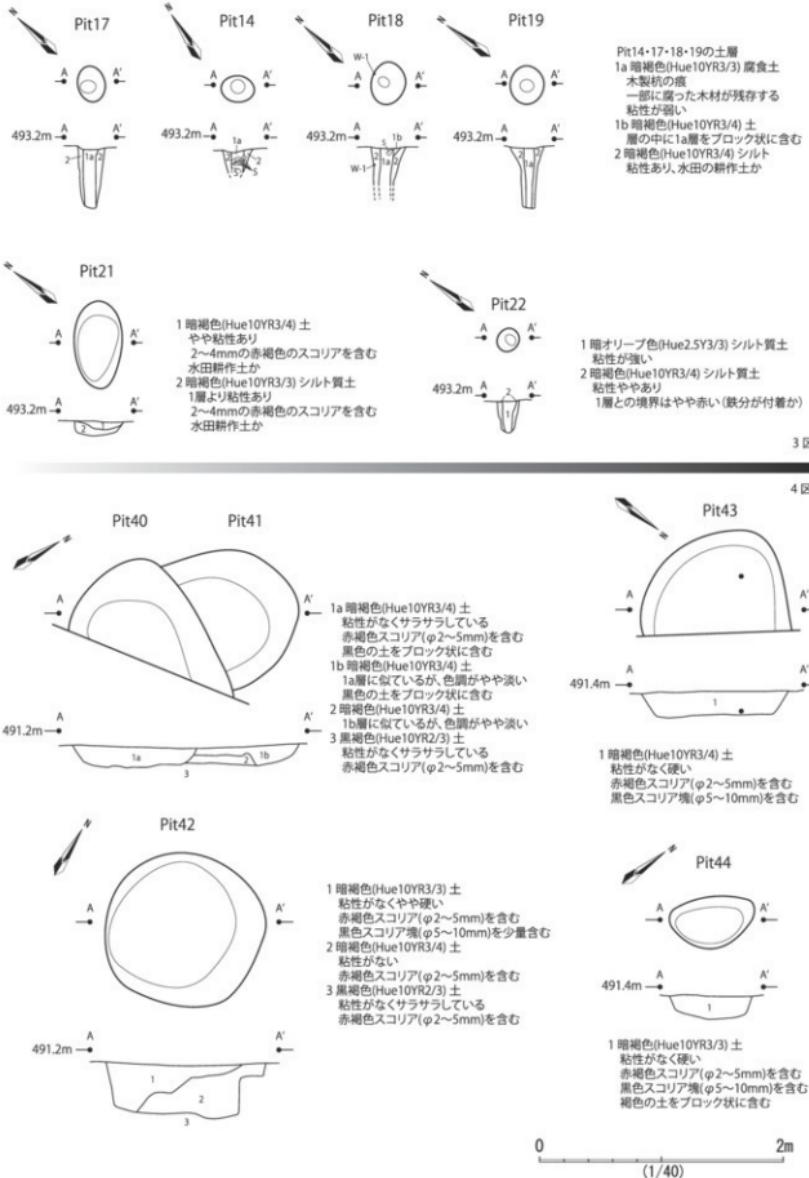
遺構名	図版	調査区	主軸	長さ(m)	深さ(m)	備考
1号溝状遺構	第16図	2区	東西	29.65	0.24	平安時代土師器片(3杯)が多数出土
2号溝状遺構			南北	1.25	-	詳細図なし
3号溝状遺構	第21図	4区	東西	4.00	-	詳細図なし
4号溝状遺構			南北	(3.16)	0.36	近代以降か?



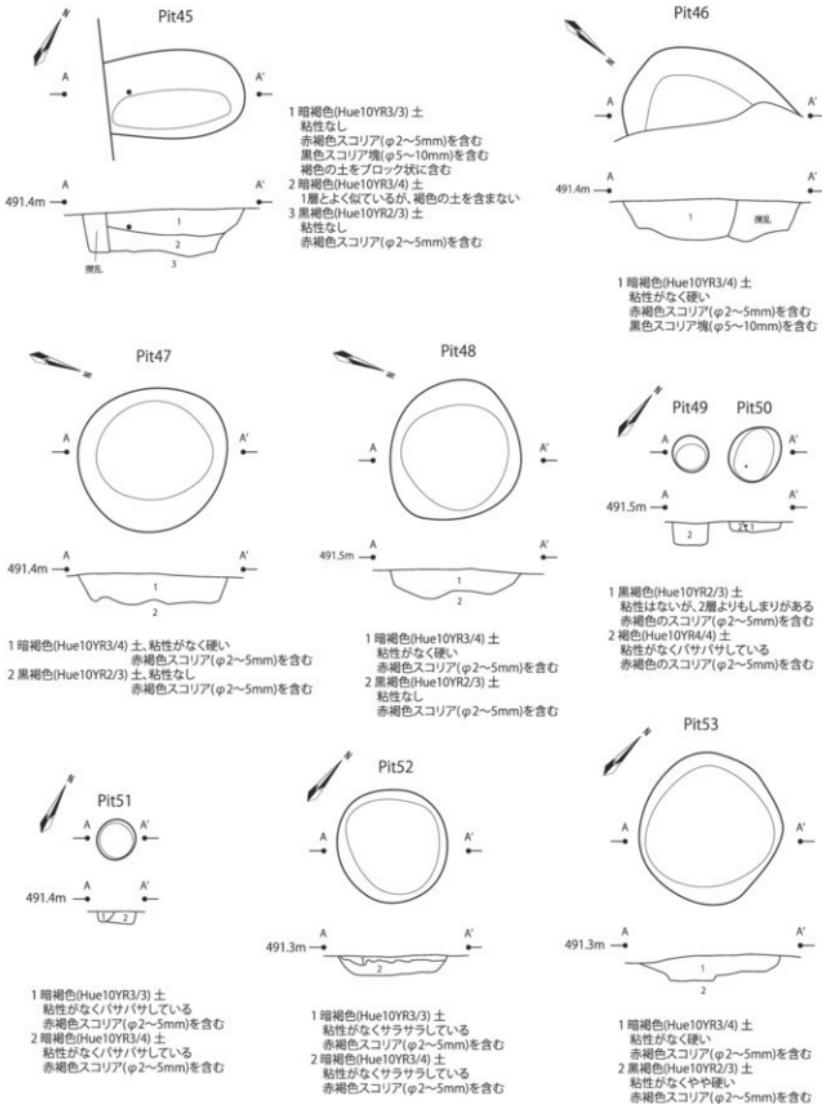
第16図 2区1号溝状遺構



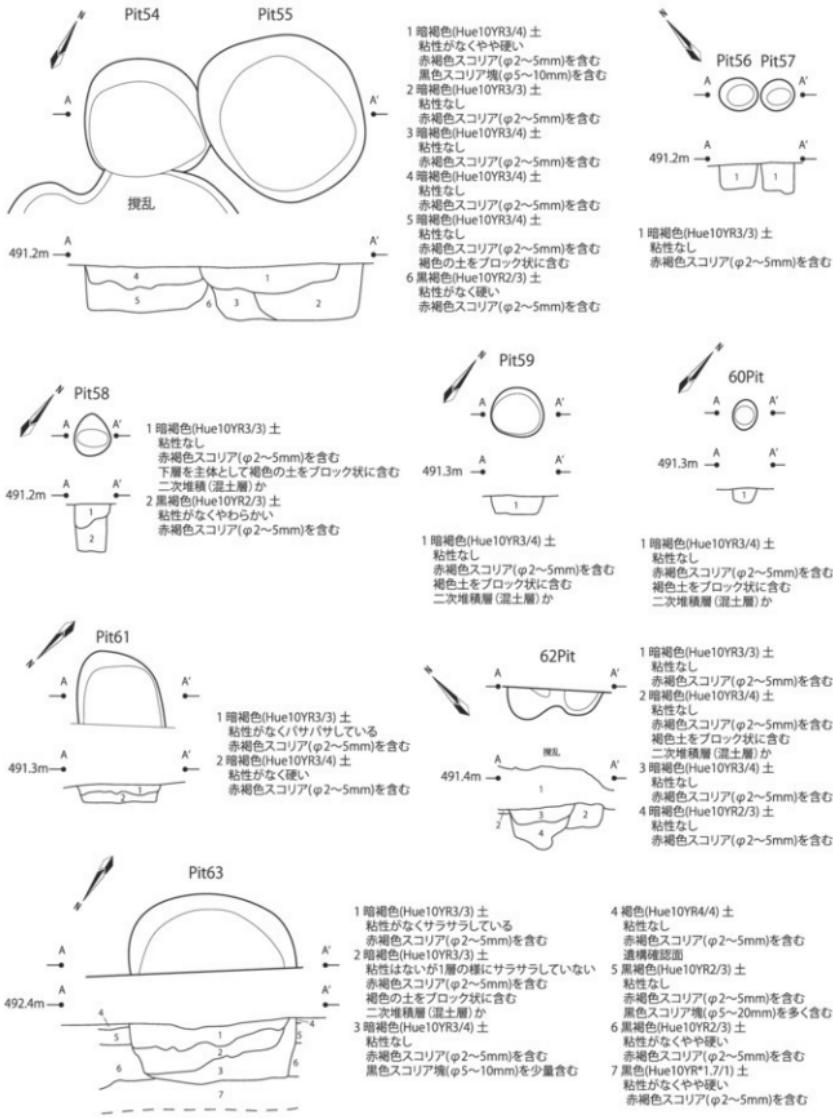
第17図 2区遺構 (pit1 ~ 6、8、10 ~ 12、24 ~ 25)



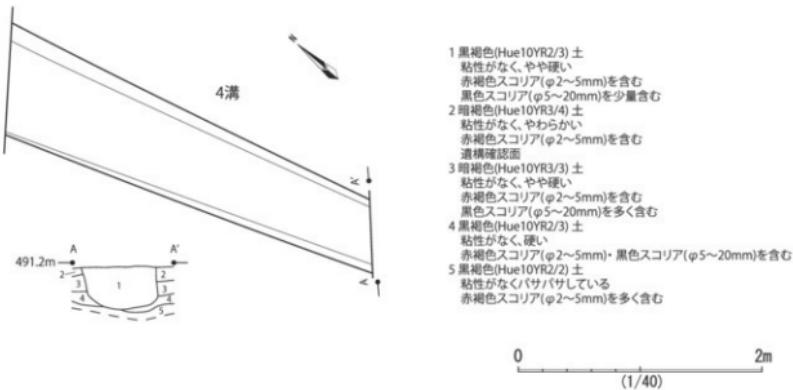
第18図 3区・4区遺構 (pit14、17~19、21~22、40~44)



第19図 4区遺構2(pit45~53)



第20図 4区遺構3 (pit54 ~ 63)

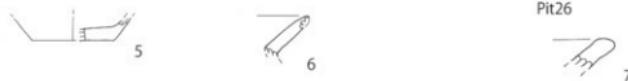


第 21 図 4 区遺構 4 (4 号溝状遺構)

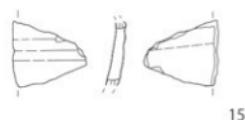
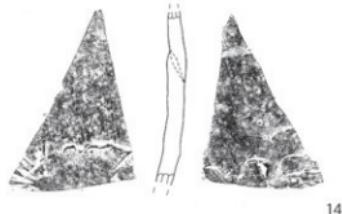
1号溝状遺構



Pit26



2区遺構外出土遺物



3区遺構外出土遺物



第22図 第1期調査出土遺物

第5表 第1期調査出土遺物一覧表

番号	調査区分	時期	場所	器別	法量cm ³	内は現状 外は既存	色調	胎土	焼成	特徴	残存半分位	遺物取り上げ番号	備考	
1	2区 1満?	9世紀後半	上側面	环	13.0	-	(1.4) 周内褐色5YR5/6 輪石・黒芸母・黒運母	良	ナデ	ロクロ	5%	口縁部	P129	
2	2区 1満	9世紀後半	上側面	环	-	-	(1.7) 周内褐色5YR5/6 輪石・黒芸母・赤色粒子	良	ナデ	ロクロ	5%	口縁部	P32	
3	2区 1満	9世紀後半	上側面	环	-	-	(1.6) 周内褐色5YR5/8 輪石・黒芸母	良	ロクロ・口縁部成形不良	5%	口縁部	P51	口縁の成形が十分でなく、段差が残つてます。	
4	2区 1満	9世紀後半	上側面	环	5.0	(1.6)	周内褐色2.5Y5/6 黒運母・黒色粒子	良	斯文	ヘラ削り?	5%	体部	P40	摩耗が激しい。
5	2区 1満	9世紀後半	上側面	环	5.0	(1.4)	相色7.5YR6/6 輪石・石英・黒芸母	良	ナデ	ヘラ削り?	5%	底部	P34	
6	2区 1満	9世紀後半?	上側面	裏	-	-	(2.5) 赤褐色5YR4/6 輪石・赤色粒子	良	ナデ	ハゲ	5%	口縁部～輪部	P27	
7	2区 Pn26	平安	上側面	裏	-	-	(1.8) に5Y5/6褐色2.5Y4/4 黒運母・黒色粒子	良	ナデ	ナデ	5%	口縁部	P89	
8	2区	8世紀末葉～9世紀	上側面	环	-	-	(1.8) 相色5YR6/6 石英・黒芸母・黒運母	良	ロクロ	ロクロ	5%	口縁部	P103	
9	2区	8世紀末葉～9世紀	上側面	环	-	-	(2.0) に5Y5/6黄褐色10YR6/4 黒運母・黒色粒子	良	ロクロ	ロクロ	5%	口縁部	P19	
10	2区	9世紀後半	上側面	环	-	4.0	(1.1) 相色7.5YR6/6 輪石・赤色粒子	良	ナデ	ヘラ削り	5%	体部～底部	P44	
11	2区	9世紀後半	上側面	环	-	-	(1.0) 周内褐色5YR5/6 黒運母・黒色粒子	良	ナデ	ロクロ	5%	口縁部	P128	
12	2区	9世紀中期～10世紀	上側面	环	9.0	-	(2.7) 小赤褐色5YR4/6 輪石・黒芸母・赤色粒子	良	ロクロ	ロクロ	5%	口縁部	P28.1	
13	2区	9世紀後半～10世紀 記中葉	上側面	黑色土器	10.8	-	(1.6) 外:相色7.5YR6/6 内:褐色10YR2/1	輪石・黒運母	良	内黒・ナデ	ロクロ	5%	口縁部	P69.1
14	2区	中世	陶器	裏	-	-	赤褐色7.5YR4/2	密	良	ナデ・粗面	ナデ	5%	輪部	P86
15	2区	中世	陶器	裏	-	-	(4.0) オリーブ黄色7.5Y5/3	良	絆	絆	5%	輪部	P1	
16	3区	9世紀後半～10世紀	上側面	环	-	4.5	(0.8) 周内褐色5YR5/6 輪石・赤色粒子	良	ヘラ削り?	5%	底部	P85		
17	3区	9世紀	上側面	高台付环	-	4.5	(0.9) 周内褐色7.5YR5/6 輪石・黒運母・黒色粒子	良	ナデ	割り調整箇所	5%	底部	P77	
18	3区	10世紀後半 ～11世紀	上側面	高台付环	-	6.5	(1.0) に5Y5/6褐色7.5YR5/4 輪石・黒運母・黒色粒子	良	ロクロ	回転系切り	10%	底部	P82	
19	3区	平安	瓦状器	裏	-	(2.7) 黑褐色10YR3/2 輪石・赤色粒子	密	良	タキ	5%	輪部	P79		
20	3区	中世	陶器	裏	-	4.5	(1.1) オリーブ色5Y5/4 輪石・赤色粒子	良	底輪	5%	底部	P81		

動物遺存体

調査区分	遺構	時期	部位	動物種	法量mm	内は現状外 は既存	廻所	裏存半 分位	光波取り 上げ番号	備考
3区	廻孔	不明	廻	ワマ	(21.4)	(11.5) (58.1)	下墻(左)	90%	B3	4歳ほどの若～成馬

第2節 第2期調査

(1) 5区第1面（第23～25図、遺物第32図）

① 溝状遺構・連結溝状遺構

溝状遺構17条、連結溝状遺構2基が検出された。ここでいう溝状遺構は、そのほとんどが長方形の細長い土坑であるが、調査時の表記を使用し溝状遺構とする。連結溝状遺構は、溝状遺構がいくつにも切りあっているものである。同じようにいくつもの切り合いをもち、検出面では単位が不明確で、一見繋がっているように思われる溝状遺構は、美通跡等でも発見されている。

・6号溝状遺構（第24図）

東西方向に軸をとり長さ2.85m、最大幅70cmでやや不整の長方形となる。常滑産の甕の破片が出土しており（遺物3）、中世に帰属すると考えられる。

・9号溝状遺構（第24図）

南北方向に軸をとり、長さ2.9m最大幅55cmで闊丸の長方形となる。一部で8号溝状遺構と切り合うが、プランや大きさもほぼ同じであり、同時に掘りこまれている可能性も考えられる。

9号溝状遺構からは、白磁碗の破片が出土している（遺物4）。口縁部がなく、断片的な資料ではあるが、太宰府編年白磁IV～V類と考えられ、13世紀頃に時期を与えることができる。なお、隣接地点（H23年度調査）の調査においても中世の青磁碗が出土している。

・2号連結溝状遺構（第23図）

検出時には切り合いが不明であった遺構で、実際に掘ってみると単位ごとの切り合いが判明した。しかし、一部では底面を共有する単位があり、遺構の同時性も否定はできない。およそ長さ3m前後の溝状遺構が一つの単位をなしているが、B-B'セクションやE-E'セクションで分かるように、土坑状に深く掘られている部分もある。

遺物1は須恵器の転用砥石である。須恵器甕の肩部と頸部の接合する部分で、肩部側を再利用している。側面は弧を描いており、底面が認められる。2は土師質土器の皿の破片である。口縁部のみであり、全体の大きさは不明だが、11～12世紀頃と考えられる。11は銭貨「開元通寶」である。唐銭で古代から中世に日本で流通する。これらの遺物は出土箇所が異なるため、2号連結溝状遺構の年代観をとらえるのが困難であるが、おおむね10世紀から13世紀ころに与えてよいだろう。

(ii) 土坑

立会時に検出した土坑を含めて17基の土坑が検出された。このうち4・14・15・16号土坑、立会1号土坑は4区でも認められた円形土坑であり、掘り込みはややオーバーハングする。また、3・6・7・8・9・11号土坑は、pit状を呈すが、調査時の表記により報告する。

・6号土坑（第25図）

直径約39cmのほぼ正円形で、深さは最大で36cmである。6号土坑からは、遺物10の銭貨が出土した。遺物10は差銭として3枚が密着して出土しているため、それをもとに報告する。10-1は承和通寶、10-2、10-3は開元通寶である。10-3の裏面には紐が残っている。中世に流通したものと考えられる。

(iii) 遺構外出土遺物（5～9）

遺物5は弥生土器の甕の破片である。1面から2面の間層より出土しているが、正確な位置は不明である。外面は条痕文で調整されており、弥生時代中期に年代を与えられる。遺物6、7は土師器の甕の破片である。奈良・平安時代のものと推定される。遺物8は磁器の筒形碗である。18世紀中～後葉とみられる。遺物9は碗の破片で、文字が刻まれている。

(2) 5 区第2面(第26図～第29図)

(i) 土坑

円形を呈する場合、直径30cm以上のものを土坑、それ以下をpitとして遺構番号をつけた。合計で65基の土坑を検出した。掘り方が安定せず、性格が不明なものが多い。遺構からは遺物が出土していない。

(ii) pit・柵列状遺構

合計44基のpitを検出した。そのうち直線的に等間隔でpitが並ぶものについて、柵列状遺構とした。1号柵列は4基からなり、約1m間隔。2号柵列遺構も4基からなり、約2.7m間隔。1号柵列遺構及び2号柵列遺構は斜交しており、時期が異なると想定できる。遺構の年代については遺物が出土していないため不明である。

(iii) 溝状遺構

幅1mほどでクランクする溝を1条調査した。18号溝は2面で調査した遺構だが、実際は1面より上層から掘り込まれている。遺物の出土がないため年代等は不明だが、区画等を示すものと考えられる。

(3) 6区(第29図)

6区からは、5区1面に相当する遺構面で、円形を呈する土坑が5基みつかった。遺物は出土しなかった。

(4) 7区(第30・31図、遺物第32図)

(i) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(第28図)は、東北東—西南西に軸をとるもので、調査区が狭いため全貌は不明だが、現状では南北(梁行)1間、東西(桁行)2間となる。柱間は約1.8mで、中央の柱(22pit, 25pit)の掘り込みはごく浅い。pitの覆土の特徴は中近世の遺構に共通するものであり、1号掘立柱建物もこの時期に想定できる。

(ii) 土坑

8基の土坑を検出した。このうち57号土坑～62号土坑は、覆土がそのほかの遺構と異なり、暗灰黄色を呈するものが多く、奈良・平安時代の遺物を含むものがある。

・59号土坑(第31図)

不整の方形を呈する土坑である。土坑の半分は調査区北側の範囲外に続く。掘り込みは59cm。遺物12は甲斐型壺の破片である。内外面に暗文をもち、口縁部が尖形となり、8世紀末頃から9世紀初頭に年代を与えられる。13は甲斐型壺の破片である。

・62号土坑(第31図)

1辺約1.1mの隅丸方形を呈する土坑である。深さは52cm。遺物14～16は壺の胴部の破片である。断片的な資料だが、15は駿東型壺、16は堀之内原typeの胎土の特徴をもつ。

(iii) pit

12基のpitを検出した。大半が中近世の遺構の覆土に共通するものである。7号pitからは常滑産の壺の破片が出土している(遺物17)。

(iv) 遺構外出土遺物(18～23)

遺物18～20は甲斐型壺の口縁の破片である。遺物20は外面に横向きのミガキがあり、甲斐型壺の初期の様相を示す。21・22は古代末～中世の資料。23は搅乱中より見つかった古代の須恵器の壺片である。

第6表 第2期調査土坑・pit一覧表

遺構名	図版	調査区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考	
1号土坑	第25図	5区1面	0.94	0.55	0.08		
2号土坑			南北1.92	幅0.58	0.55	2つの重複する土坑	
3号土坑			0.48	0.4	0.41		
4号土坑			1.19	1.11	0.12		
5号土坑			1.07	0.74	0.46		
6号土坑			0.39	0.37	0.36	渡来銭出土	
7号土坑			0.33	0.31	0.53		
8号土坑			0.42	0.41	0.44		
9号土坑			0.57	0.45	0.1		
10号土坑			(0.74)	(0.47)	0.3	詳細図掲載無し	
11号土坑	第25図	5区2面	0.61	0.29	0.7	2つの重複するピット	
12号土坑			南北2.03	幅0.51	0.15	長方形	
13号土坑			(1.70)	0.41	0.22	不整形	
14号土坑			1.43	(0.88)	0.12		
15号土坑			1.39	(0.84)	0.09		
16号土坑			1.51	(1.06)	0.34		
17号土坑	第24図	6区	2.16	0.85			
18号土坑	第29図		0.95	(0.59)	0.11		
19号土坑			1.56	1.48	0.08		
20号土坑			1.32	1.27	0.08		
21号土坑	第26図	5区2面	(0.91)	-	0.06		
22号土坑			0.48	0.32	0.07		
23号土坑			0.47	0.32	0.17		
24号土坑			0.51	0.27	0.09		
25号土坑			0.28	0.31	0.08		
26号土坑			0.4	0.35	0.29		
27号土坑			0.65	0.52	0.06		
28号土坑			0.37	0.3	0.14		
29号土坑			0.36	0.33	0.07		
30号土坑			0.38	0.37	0.07		
31号土坑	第27図	6区	0.49	0.39	0.05		
32号土坑			0.53	0.38	0.12		
33号土坑			0.38	0.35	0.07		
34号土坑			(1.23)	-	0.12		
35号土坑			0.54	0.46	0.14		
36号土坑			0.54	0.35	0.19		
37号土坑	第27図	5区2面	0.44	0.4	0.13		
38号土坑			0.6	0.54	0.1		
39号土坑			0.52	0.46	0.1		
40号土坑			0.35	0.31	0.08		
41号土坑			0.36	0.27	0.12		
42号土坑			0.55	0.33	0.11		
43号土坑			0.54	0.47	0.08		
44号土坑			0.45	0.34	0.13		
45号土坑			0.43	0.37	0.15		
46号土坑			0.39	0.36	0.11		
47号土坑			0.58	0.53	0.27		
48号土坑			0.48	0.38	0.16		
49号土坑			0.33	0.28	0.19		
50号土坑			0.53	0.42	0.11		
51号土坑	第30図	7区	0.64	0.48	0.2		
52号土坑			0.39	0.31	0.15		
53号土坑			0.35	0.3	0.17		
54号土坑			0.6	0.53	0.13		
55号土坑			0.48	0.39	0.11		
56号土坑			欠番	欠番	欠番	欠番	
57号土坑			1.64	1.45	0.49		
58号土坑			1.11	-	0.37		
59号土坑			辺1.21	-	0.59	隅丸方形 古代の遺物出土	
60号土坑			辺1.08	辺0.86	0.47	隅丸方形 古代の遺物出土	
61号土坑	第31図	7区	1.01	0.76	0.55	隅丸方形 古代の遺物出土	
62号土坑			辺1.11	辺1.07	0.52	隅丸方形 古代の遺物出土	
63号土坑			辺2.02	-	0.71	隅丸方形	

6 4号土坑	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番
6 5号土坑			0.64	0.43	0.16	
6 6号土坑			0.39	0.32	0.09	
6 7号土坑			0.45	0.35	0.13	
6 8号土坑			0.46	0.34	0.11	
6 9号土坑			0.56	0.36	0.12	
7 0号土坑			0.58	0.44	0.14	
7 1号土坑			0.48	0.39	0.18	
7 2号土坑			0.42	0.41	0.16	
7 3号土坑			0.42	0.36	0.13	
7 4号土坑			0.36	0.35	0.14	
7 5号土坑			0.68	0.55	0.16	
7 6号土坑			0.67	0.6	0.12	
7 7号土坑			0.54	0.46	0.3	
7 8号土坑			0.56	0.46	0.19	
7 9号土坑			0.95	0.66	0.2	
8 0号土坑			0.47	0.36	0.15	
立会1号	第25図	5区1面	1.3	(0.54)	0.39	

pit 遺構名	図版	調査区	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
1pit			0.22	0.22	0.15	
2pit			0.23	0.19	0.19	
3pit			0.2	0.15	0.1	
4pit			0.27	0.26	0.24	
5pit			0.2	0.18	0.16	
6pit			0.19	0.17	0.19	
7pit			0.25	0.19	0.14	中世の鐵片出土
8pit			0.28	0.23	0.05	
9pit			0.25	0.21	0.1	
10pit			0.29	0.26	0.12	
11pit			0.21	0.18	0.08	
12pit			0.23	0.16	0.09	
13pit			0.26	0.24	0.08	
14pit			0.22	0.17	0.2	
15pit			0.23	0.2	0.12	
16pit			0.26	0.23	0.1	
17pit			0.23	0.19	0.14	
18pit	-		0.2	0.19		詳細図掲載無し
19pit	第26図		0.28	0.24	0.1	
20pit			0.19	0.17	0.05	
21pit			0.4	0.36	0.26	1号掘立柱建物跡
22pit			0.26	0.21	0.05	1号掘立柱建物跡
23pit			0.45	0.4	0.17	1号掘立柱建物跡
24pit			0.35	0.27	0.46	1号掘立柱建物跡
25pit			0.24	0.22	0.05	1号掘立柱建物跡
26pit			0.34	0.29	0.22	1号掘立柱建物跡
27pit			0.28	0.28	0.15	
28pit	第31図		0.38	0.35	0.16	
29pit			0.42	0.38	0.22	
30pit			0.23	0.2	0.03	
31pit			0.28	0.26	0.14	
32pit			0.39	0.32	0.31	
33pit			0.41	0.36	0.37	
34pit			0.32	0.3	0.05	
35pit			0.31	0.28	0.22	
36pit			0.35	0.31	0.13	
37pit			0.23	0.22	0.37	
38pit			0.3	0.29	0.12	
39pit	-		0.31	0.28		詳細図掲載無し
40pit			0.27	0.25	0.15	
41pit	第26図		0.33	0.33	0.14	
42pit			0.3	0.25	0.12	
43pit	-		0.31	0.27		詳細図掲載無し
44pit	-		0.32	0.29		詳細図掲載無し

第7表 第2期調査溝状遺構一覧表

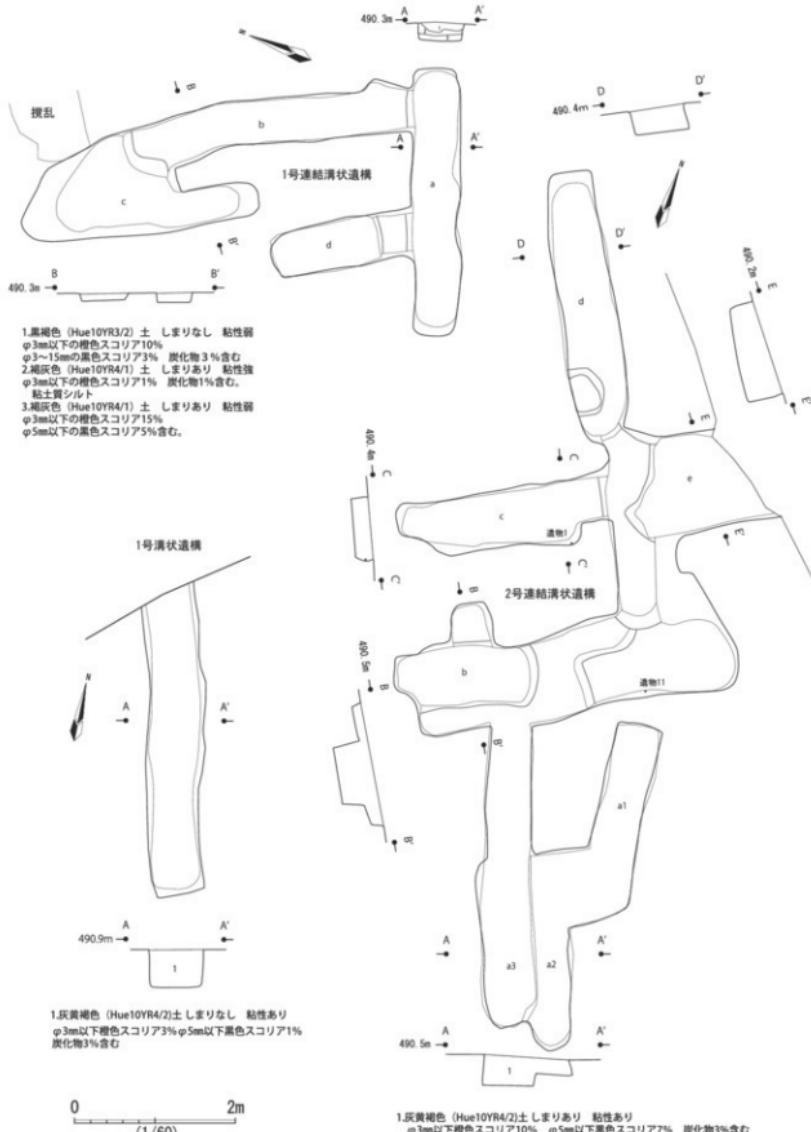
遺構名	図版	調査区	主軸	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	備考	
1号溝状遺構	第23図	5区1面	南北	(3.67)	0.71	0.46		
2号溝状遺構			東西	3.27	0.65	0.23		
3号溝状遺構			東西	3.19	0.73	0.08		
4号溝状遺構			南北	1.80	0.56	0.15		
5号溝状遺構			南北	4.65	0.61	0.29		
6号溝状遺構			東西	2.86	0.74	0.35	中世の常滑甌出土	
7号溝状遺構			東西	2.50	0.51	0.07		
8号溝状遺構			南北	2.93	0.53	0.55		
9号溝状遺構			南北	2.62	0.58	0.60	中世の白磁碗片出土	
10号溝状遺構			東西	5.20	0.54	0.30		
11号溝状遺構			南北	1.94	0.60	0.22		
12号溝状遺構			東西	1.85	0.53	0.10		
13号溝状遺構			南北	3.97	0.55	0.15		
14号溝状遺構			東西	1.49	0.47	0.22		
15号溝状遺構			南北	(1.00)	0.60	0.32		
16号溝状遺構	第25図		東西	2.38	0.48	0.08		
17号溝状遺構			南北	(1.01)	0.60	0.25		
18号溝状遺構	第28図	5区2面	東西	東西 10.21 南北 3.60	1.10	(0.07)	実際は1面から掘り込まれている	

第8表 第2期調査連結溝状遺構一覧表

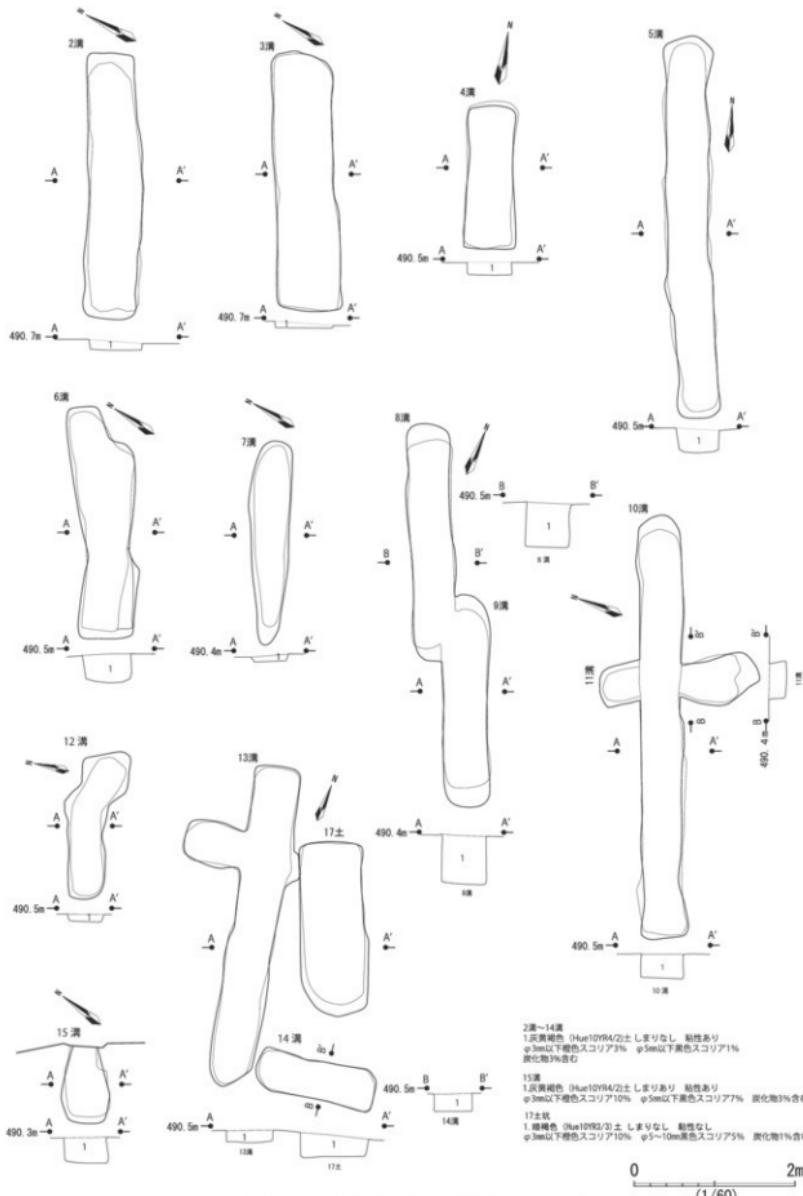
遺構名	図	調査区	溝番号	長さ (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	備考
1号連結溝状遺構	第23図	5区	a	3.29	0.64	0.24	
			b	3.37	0.67	0.09	
			c	2.90	1.24	0.12	
			d	1.76	0.63	-	
2号連結溝状遺構	第23図	5区	a1	2.45	0.60	-	
			a2	2.44	0.51	0.18	
			a3	3.70	0.68	0.38	
			b	1.77	0.83	0.45	
			c	2.58	0.71	0.23	
			d	3.29	0.77	0.32	
			e	(1.77)	1.19	0.44	かわらけ、須恵器転用砥石、渡来銭出土

第9表 第2期調査柵列遺構一覧表

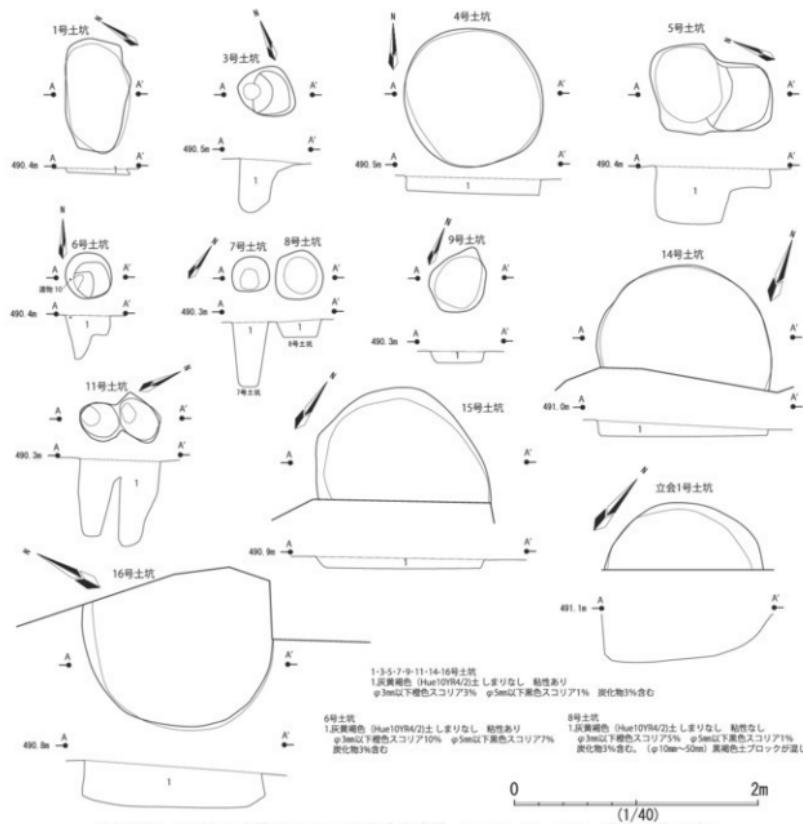
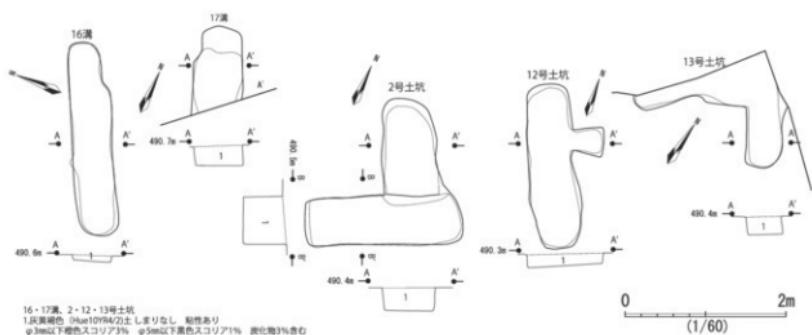
遺構名	図	調査区	ピット番号	長絶 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考	
1号柵列遺構	第29図	5区2面	a	0.19	0.18	0.12		
			b	0.22	0.19	0.20		
			c	0.25	0.22	0.13		
			d	0.32	0.26	0.11		
2号柵列遺構		5区2面	a	0.16	0.16	0.07		
			b	0.24	0.20	0.21		
			c	0.27	0.21	0.16		
			d	0.29	0.25	0.12		
3号柵列遺構		5区2面	a	0.23	0.21	0.06		
			b	0.27	0.22	0.23		
			c	0.27	0.22	0.25		
4号柵列遺構		5区2面	a	0.35	0.34	0.14		
			b	0.17	0.14	0.15		
			c	0.30	0.26	0.12		



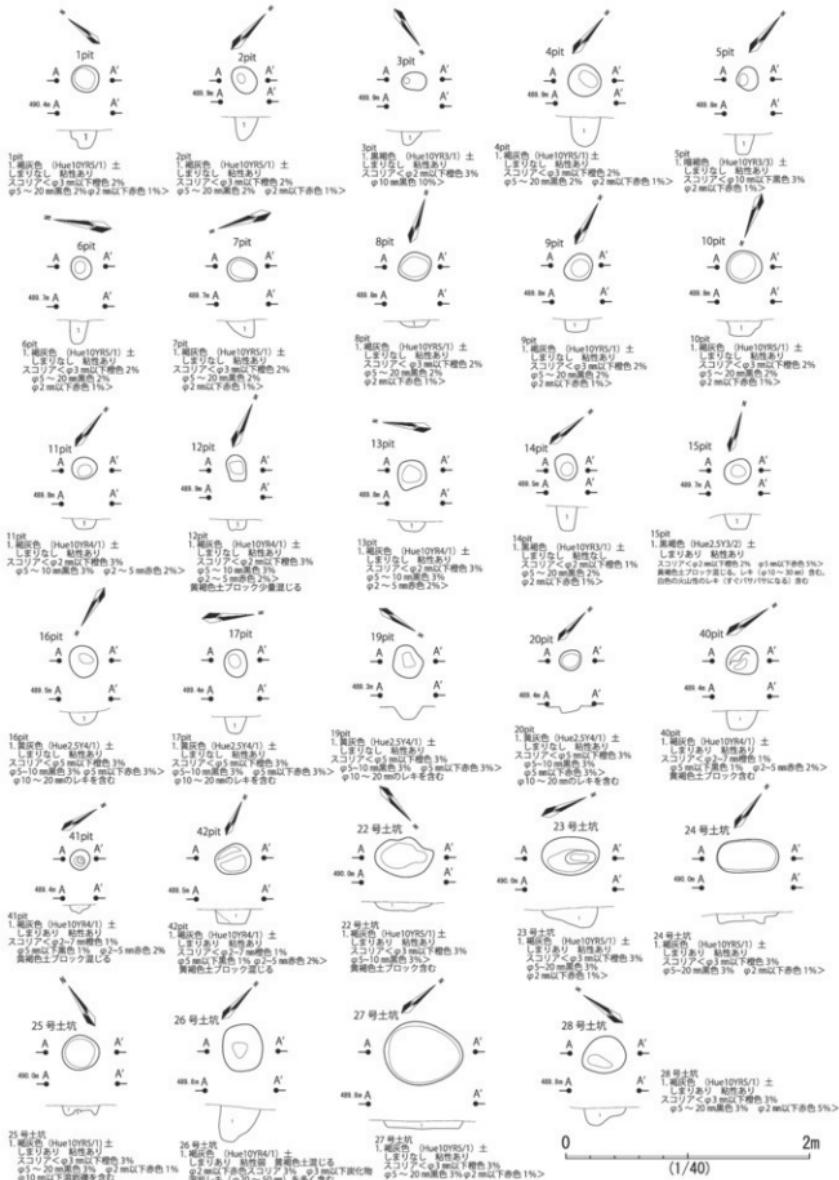
第23図 5区1面遺構 (1・2号連続溝状遺構、1号溝状遺構)



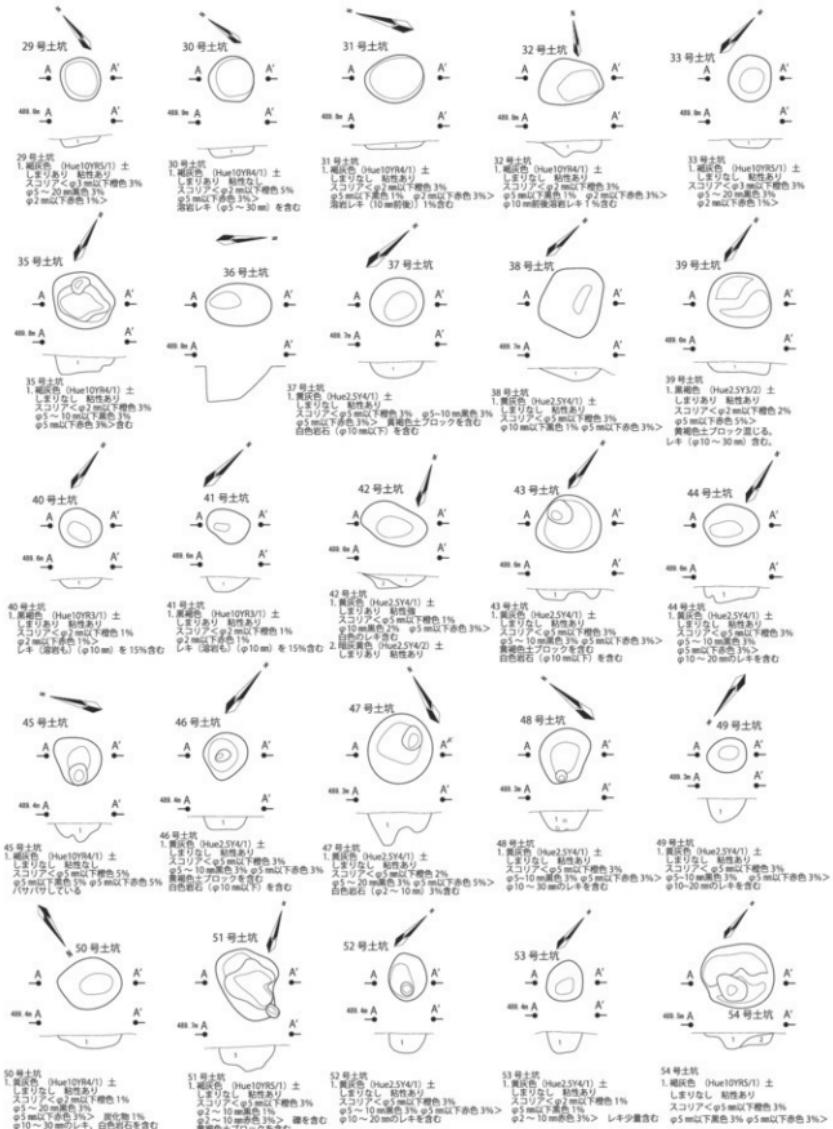
第24図 5区1面遺構(2~15号溝状遺構)



第25図 5区1面造構3 (16・17号溝状遺構、1～9、11～16、立食1号土坑)

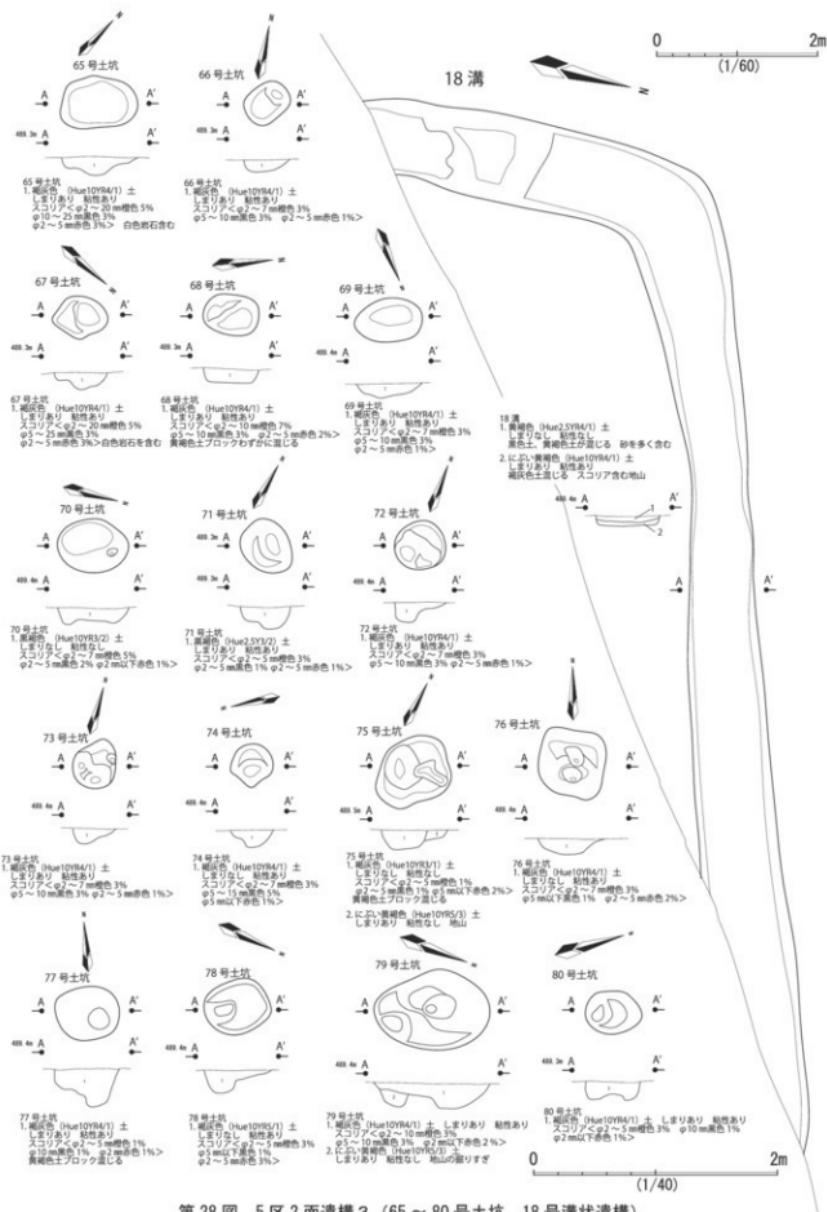


第26図 5区2面遺構1 (1 ~ 17、19・20、40 ~ 42pit、22 ~ 28号土坑)

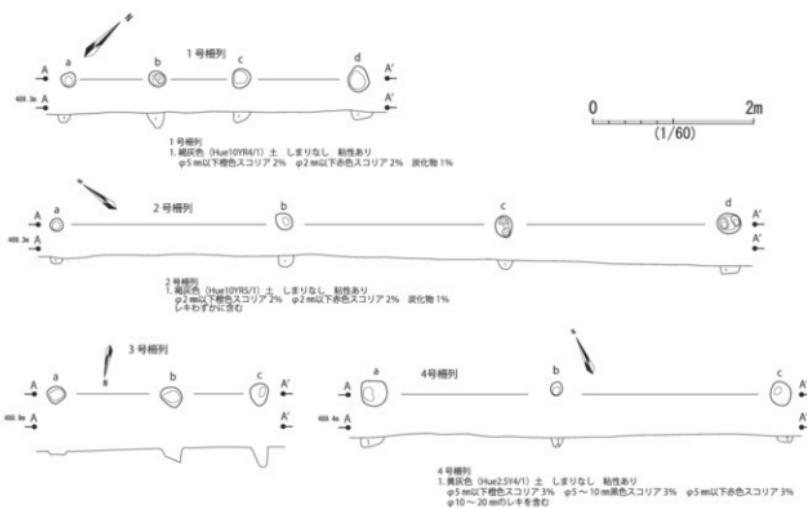


第27図 5区2面遺構2 (29~54号土坑)

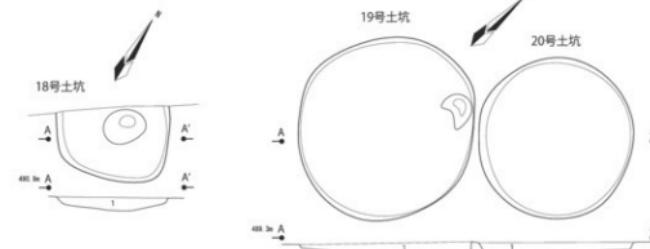
0 2m
(1/40)



第28図 5区2面遺構3 (65~80号土坑、18号溝状遺構)



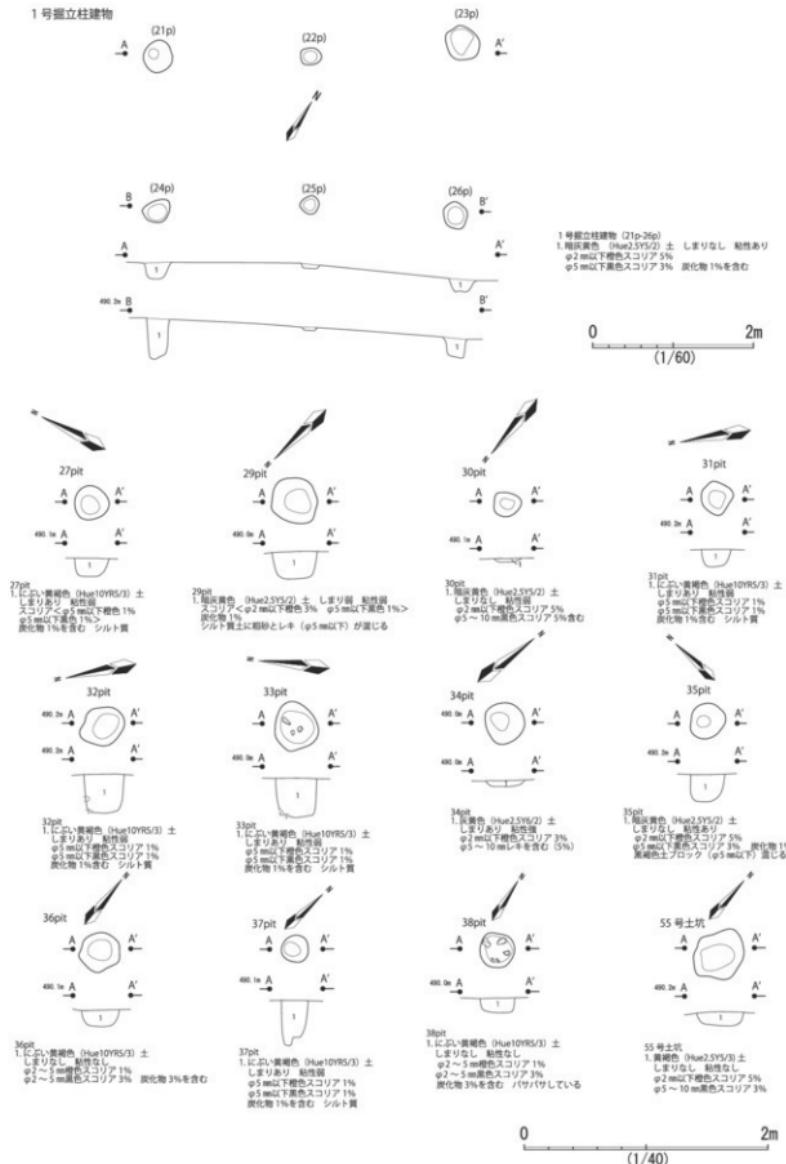
6区



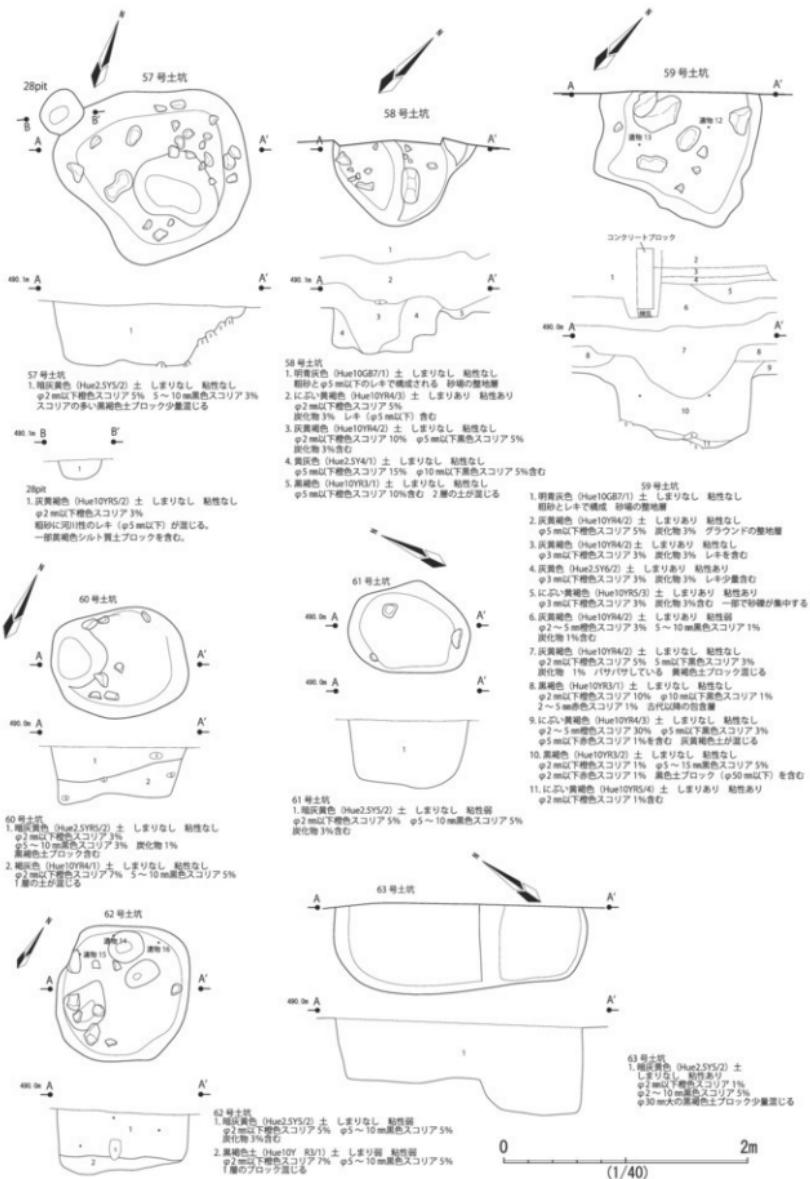
18-21号土坑、34号土坑
1. 黄褐色 (Hue10YR3/3) 土
しまりなし、粘性なし
φ3 mm以下褐色スコリア 5%
φ2 mm以下赤色スコリア 5%
漢化物粒子 3% 含む

0 2m
(1/40)

第29図 5区2面遺構4 (1~4号柵列遺構) 6区遺構 (18~21、34号土坑)

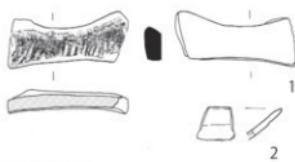


第30図 7区遺構1 (1号掘立柱建物跡、27、29～38pit、55号土坑)

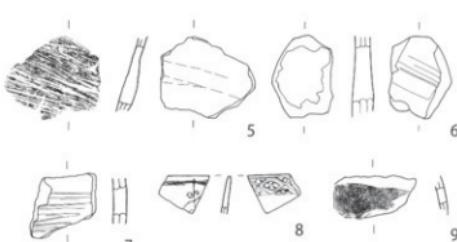


第31図 7区遺構2 (28pit、57~63号土坑)

2号連続溝状遺構



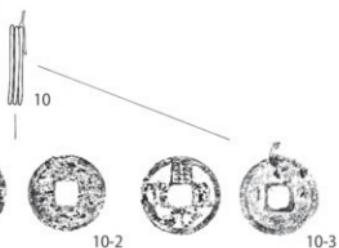
5区遺構外出土遺物



6号溝状遺構



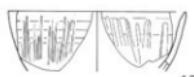
6号土坑



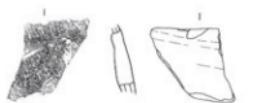
9号溝状遺構



59号土坑



7pit

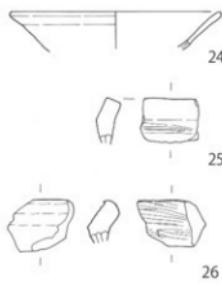


2号連続溝状遺構

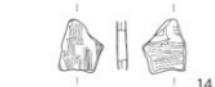


0 $S=2/3$ (10, 11) 5 cm

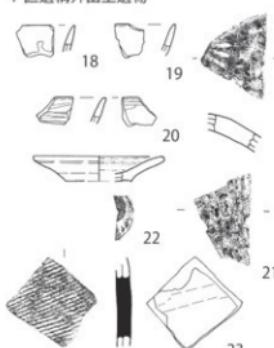
立会②出土遺物



62号土坑



7区遺構外出土遺物



0 $S=1/3$ 10cm

第32図 第2期調査出土遺物

第10表 第2期調査出土遺物一覧表

番号	調査区	遺構	時期	種別	器種 寸法	立量 cm) 内寸法(外寸法)	色調	銘文	塊		塊(手 上)寸法	部位	焼成率 % 11時部	備考	
									内面	外面					
2	5区	2号遺跡構	11～12世紀	土器質	圓	-	-	白色粒子・砂粒	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	5%	常滑窯	
3	5区	6号遺跡構	中世	陶器	圓	-	-	白色粒子・黑色動物	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	5%	常滑窯	
3	5区	9号遺跡構	13世紀前半	陶器	圓	-	-	白色粒子・7.5VR6/6	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	5%	常滑窯	
5	5区	道構外	学生時代明	鉢	圓	-	-	白色粒子・7.5VR6/8.1	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	10%	輸入(?)可能性	
5	5区	道構外	奈良・平安時代	土器質	圓	-	-	白色粒子・金雲母・砂粒	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	10%	輸入(?)可能性	
6	5区	道構外	奈良・平安時代	土器質	圓	-	-	白色粒子・金雲母・不 規則性多い	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	10%	輸入(?)可能性	
7	5区	道構外	奈良・平安時代	土器質	圓	-	-	白色粒子・金雲母・ 黒雲母	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	10%	輸入(?)可能性	
8	5区	道構外	18世紀中～後葉	陶器	圓	-	-	白色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	17%	甲斐窯	
12	7区	59号土坑	8世紀末～9世 紀初頭	土器質	圓	[108]	相色 5VR6/6	褐色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
13	7区	59号土坑	余長・平安時代	土器質	圓	-	明治初期 7.5VR5/6	白色粒子・砂粒	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
14	7区	62号土坑	余長・平安時代	土器質	圓	-	相色 5VR6/8	白色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
15	7区	62号土坑	余長・平安時代	土器質	圓	-	にごり褐色 7.5VR5/3	白色粒子・透明粒子	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
16	7区	62号土坑	余長・平安時代	土器質	圓	-	にごり褐色 5VR6/4	小赤石・釋	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
17	7区	7pit	中世	陶器	圓	-	相色 7.5VR6/6	白色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
18	7区	道構外	9世紀前半	土器質	圓	-	甲斐初期 5VR6/6	褐色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
19	7区	道構外	9世紀前半	土器質	圓	-	甲斐中期 5VR6/6	褐色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
20	7区	道構外	8世紀後葉～木 葉の葉	土器質	圓	-	甲斐後期 5VR6/6	褐色	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
21	7区	道構外	中世	陶器	圓	-	明治黄色 2.5YR5/2	白色粒子・空気孔	良	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15%	11時部	
22	7区	道構外	11～12世紀	土器質	圓	[80] (4.0)	相色 7.5VR6/6	白色動物・白色粒子	良	ナデ	ナデ	ナデ	20%	11時部	
23	7区	道構外	余長・平安時代	土器質	圓	-	黄色 5.5YR4/1	白色動物・白色粒子	良	ナデ	ナデ	ナデ	5%	11時部	
24	立会2	道構外	9世紀末～10世 紀初頭	土器質	圓	[3.0]	明治褐色 5VR6/6	黑色動物・白色粒子	良	ナデ	ナデ	ナデ	5%	11時部	
25	立会2	道構外	10世紀中葉	土器質	圓	-	1.5cm 深	黑色動物・白色粒子	良	ナデ	ナデ	ナデ	5%	11時部	
26	立会2	道構外	10世紀後葉	土器質	圓	-	相色 5VR6/6	1.16cm 孔・黑色粒子・砂粒	良	ナデ	ナデ	ナデ	5%	11時部	
石製品等															
番号	調査区	遺構	時期	種別	器種	法量 cm)	内寸法	外寸法	内寸法	外寸法	内寸法	外寸法	内寸法	外寸法	備考
1	5区	2号遺跡構	古代末	玉器類	圓錐形	2.5	21.9	7.6	6.5	1.5	3	3	3	3	備考
9	5区	道構外	近江國	玉製品	扁	7.4	2.0	1.0	2.3	20.9	7.6	1.3	3	3	遺物D上段 NO.1
9	5区	道構外	近江國	玉製品	扁	[2.6]	[5.1]	[1.0]	2.5	20.8	8.4	6.6	1.3	2	遺物D上段 NO.2

番号	調査区	遺構	時期	種別	器種	法量 cm)	内寸法	外寸法	内寸法	外寸法	内寸法	外寸法	内寸法	外寸法	焼成率 % 11時部	備考
10	1	2号遺跡構	11～12世紀	土器質	水滴通貫	2.5	21.9	7.6	6.5	1.5	3	3	3	3	3	常滑窯
10	2	5区	6月上旬	陶器	水滴通貫	2.3	20.9	7.6	6.5	1.3	3	3	3	3	3	遺物D上段 NO.1
10	3	5区	2月上旬	陶器	水滴通貫	2.5	20.8	8.4	6.6	1.3	2	2	2	2	2	遺物D上段 NO.2
11	5区	道構外	近江國	玉製品	扁	2.8	20.7	8	7	1.4	3	3	3	3	3	常滑窯

古代

第5章 自然科学分析

株式会社加速器分析研究所

第1節 放射性炭素年代測定

(1) 測定対象試料

三ノ側遺跡は、山梨県都留市上谷五丁目 7-1 外に所在し、桂川右岸の河岸段丘上に立地する。測定対象試料は、第 5 区 2 面の地山（10 層）から出土した炭化材 1 点である（第 11 表）。なお、この試料については、樹種同定が行われている（第 2 節参照）。

なお、試料が採取された 10 層より下層に、縄文時代早期の猿橋溶岩が検出されている。

(2) 測定の意義

第 2 面からは、遺構が検出されたのみで、遺物が出土していない。年代測定によって年代観を確認する。

(3) 化学処理工程

①メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

②酸・アルカリ・酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

③試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。

④真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

⑥グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイルにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

① δ 13C は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

② 14C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C 年代は δ 13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

③ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい (14C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (14C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も δ 13C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

④暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 術を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 11 表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(6) 測定結果

測定結果を第 11・12 表に示す。

試料 1 の ^{14}C 年代は 6580 ± 30 yrBP、暦年較正年代 (1σ) は縄文時代早期末葉頃に相当する (小林編 2008)。猿橋溶岩との上下関係に整合的な結果である。

試料の炭素含有率は 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第 11 表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-160955	試料 1	2 面地山	炭化材	AAA	-24.76 \pm 0.68	6,580 \pm 30	44.09 \pm 0.15

[#8161]

第 12 表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-160955	6,580 \pm 30	44.11 \pm 0.14	6,578 \pm 28	5545calBC - 5486calBC (68.2%)	5610calBC - 5591calBC (8.3%) 5565calBC - 5480calBC (87.1%)

[参考値]

[参考文献]

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 小林達雄編 2008『総覧縄文土器』 総覧縄文土器刊行委員会
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第2節 炭化材樹種同定

はじめに

山梨県都留市に所在する三ノ側遺跡の発掘調査で第5区2面の地山から出土した炭化材について樹種同定を実施する。

(1) 試料

試料は、2面地山から出土した炭化材1点(試料1)である。なお、この試料については放射性炭素年代測定が実施されている(第1節参照)。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・極目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する(第31図)。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3) 結果

炭化材は広葉樹のクリに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・クリ(*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

試料は年輪界付近で割れており、早材部の大部分を欠く。年輪界を挟んだ道管径の変化から環孔材と判断される。小道管は多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

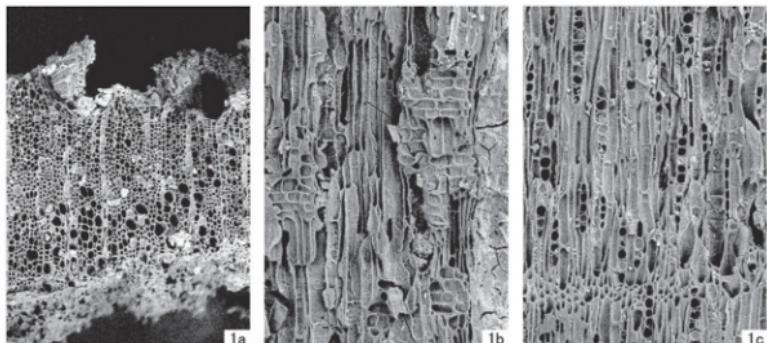
(4) 考察

三ノ側遺跡の2面地山から出土した炭化材は、クリに同定された。クリは、二次林等に生育する落葉高木で、木材は比較的重硬で強度と耐朽性が高い。

[参考文献]

- 林昭三 1991 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 pp.81-181 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 pp.66-176 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 pp.83-201 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 pp.30-166 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 pp.47-216 京都大学木質科学研究所
島地謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」 地球社
Wheeler EA., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 海青社 [Wheeler EA., Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



1.クリ(試料1)
a:木口,b:径目,c:板目

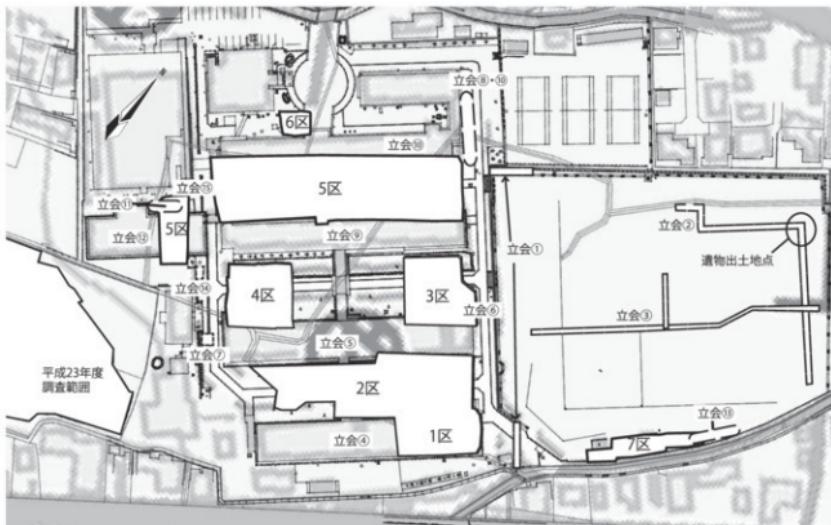
— 100 μm:a
— 100 μm:b,c

第33図 分析資料の顕微鏡写真

第6章 総括

1. 県立都留興譲館高校建設事業等に伴う立会調査

本報告地点は、平成23年度に実施した試掘調査により、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地である三ノ側遺跡の範囲として拡大変更された地点である。埋蔵文化財センターでは、遺跡の範囲変更後、平成23年度から平成28年度に至るまで十数回に及んで、校舎建設事業等に係る立会調査を実施している（第1表参照）。試掘調査結果の詳細については、各年度に刊行している県内遺跡分布調査報告書を参照願いたいが、本報告を一つの区切りとしてこれまでの立会調査地点について記載しておきたい。



第34図 調査区と立会地点

立会調査地点については、第34図にまとめた。立会調査のうち、旧校舎等の基礎を撤去する④、⑤、⑥、⑨、⑩、⑫を除いて、遺物包含層及び構造確認面に及ぶ掘削を受けたと考えられる立会箇所は、①、②、③、⑦、⑪、⑬の6地点である。このうち、⑯地点については、光波を使用して位置を記録し、本報告に反映させている（第10図）。⑯地点立会時には、円形の土坑が1基検出された（第25図立会1号土坑）。

残りの①、②、③、⑦、⑭の地点のうち、遺物が出土したのは②地点のみである。十点ほどの土師器破片が出土しているが、3点のみ図化した（第32図）。遺物24は土師器で甲斐型土器の皿である。口縁が玉縁となることから、9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。25は甲斐型土器の甕の口縁部破片で、未広口縁となることから、10世紀前～中葉に年代が与えられる。26は同じく甲斐型土器の甕の口縁部破片で、厚口口縁となることから、10世紀前葉に年代が与えられる。これらの土器は、上図で示した出土地点に集中してみられたという。多少の年代差はあるが、およそ10世紀前半代の遺物がこの地点に集中することが分かる。

立会地点②で古代の遺物が出土し、7区において古代の遺構・遺物が見つかっているように、古代集落の範囲は、（現在は三ノ側遺跡に含まれていないが）興譲館高校グラウンドのさらに北東側にも続いていることを示す。

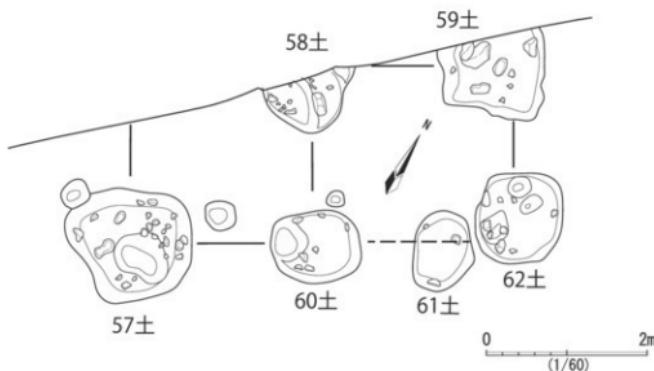
考えられる。これは現地形を確認しても想像に難くない。今後も立会・試掘調査を実施し、三ノ側遺跡東側の集落の広がりについて検討していく必要がある。

2. 発見された遺構と遺物について

今回の調査地点からは、合計で 22 条の溝状遺構、2 基の連結溝状遺構、1 棟の掘立柱建物跡、土坑 79 基、4 列の柵列状遺構、ピット 99 基が見つかった。検出された遺構の年代も、古代から中世・近世と年代に幅があり、連続的な土地の利用をうかがえるものである。中世や近世の遺構は、平成 23 年度調査地点の報告でも「Ⅱ層」を冠につけて報告しているように、覆土の特徴から古代の遺構とは識別が可能であり、5 区では集中して確認された。

確実に奈良・平安時代まで遡る遺構は、2 区（第 1 期調査）の 1 号溝状遺構と 7 区の土坑群に限定される。1 号溝状遺構は、調査担当者より旧地籍境界に平行する位置と指摘されており、土地を区切るための溝と推測される。ただし、1 号溝状遺構以南は溶岩地帯であり、区切る意義については明確ではない。排水等の目的も考えておきたい。

次に、7 区の土坑群について検討する。57 号土坑～62 号土坑までの 6 基の土坑は、遺構の覆土もほぼ共通し、奈良時代末～平安時代初期頃の遺物が出土する。



第 35 図 7 区土坑群の性格について

上図にあるとおり、これらの土坑群は 57 号土坑・60 号土坑・62 号土坑が、ほぼ等間隔で直線状に並んでおり、この線に対して垂直に 58 号土坑・59 号土坑が位置していることから、総柱型の掘立柱の建物跡である可能性が指摘できる。調査区が狭く調査後に気付いたものであるため、断定はできないが、柱間も東西 2.4m、南北 2.0m を測るものである。

三ノ側遺跡において、古代の総柱型掘立柱建物は、都留市教委の 2 次調査（都留市教育委員会 2003）で 1 棟（2 号掘立柱建物跡）、当センター平成 23 年度調査地点で 1 棟（1 号掘立柱建物跡）みつかっている。また、平成 23 年度調査地点で検出された竪穴建物跡や掘立柱建物跡は、軸線を北北西—南南東にほぼ同じくすることが指摘されている。これは、7 区で見つかった中世以降と考えられる 1 号掘立柱建物跡や、上述した古代の掘立柱建物跡になりうる土坑群の軸線の向きとも合致する。地形による制約あるいは道路に沿うようにして建てられたものと考えられる。

さて、5 区 2 面の調査についても言及しておきたい。5 区では、当初古代～中近世の面のみ調査を行う予

定であったが、トレントの深堀りを入れたところ、古代の遺構確認より 100cmほど下層に、安定した黒褐色土層と、その下層にぶい黄褐色土層が確認された。トレントでは遺構や遺物が確認されなかつたが、面的に掘り下げて遺構の有無を確認することとした。ちなみにぶい黄褐色土層をさらに掘り下げると、スコリア層のうちに猿橋溶岩流にある。調査の結果、遺構内外を問わず遺物が出土しなかつたが、第 5 章で確認されたように、第 2 面の確認面から検出された炭化物の年代は縄文時代早期となる。また、1 面から 2 面掘削中に弥生時代中期の土器片が出土していることから、第 2 面の遺構を縄文時代早期～弥生時代中期以前として捉えておきたい。特に、4 列確認した柵列状遺構は、確認面からの掘り込みは浅いため、実際はもっと上層から掘り込まれていると想定できる。

3. 課題

本報告地点の調査によって、三ノ側遺跡の古代の遺構分布域が新たに明らかとなった。古代の集落は北側を流れる桂川方面には拡大せず、南側の山ぎわに沿うかたちで東側（7 区で検出された古代の遺構）へと続いている。一方で、5 区や 6 区は遺物が出土し古代まで確実にさかのぼる遺構はみつからなかった。23 年度調査区においても、調査区の北東側では古代の遺構は少なく、本報告地点を含めて遺物包含層は面的にみられるが遺構のない地帯が存在している。地形的な制約が第一に考えられる一方、東西方向への道路に沿って集落が展開していた可能性も暗示される。

さて、平成 27 年度から 28 年度にかけて、都留市教育委員会によって実施された三ノ側遺跡西端域の発掘調査（以下、仮称して南都留新合同庁舎地点とよぶ）では、何条もの竪間溝による「ハタケ」跡と、その上から掘り込んで作った竪穴建物跡が 1 件検出されている（平野 2016）。南都留新合同庁舎地点では、幾度にも及ぶ洪水等の災害によってハタケが埋められたことにより、良好な状態で検出されたのである。本報告地点においては堆積状況が異なり、古代の遺構を即時的に埋めるような堆積土層を明確には確認できず、竪間溝については検出することができなかつた。しかし、南都留新合同庁舎地点のような風景が、この一帯にも広がっていた可能性は否定できない。今回の調査ではできなかつたが、土壤サンプリングなどをして発掘の精度を高めていく必要がある。

【参考文献】

- 都留市 1986 『都留市史』資料編地理・考古
- 都留市教育委員会 2003 『三ノ側遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告第 12 集
- 都留市教育委員会 2010 『三ノ側遺跡』『山梨県都留市内遺跡発掘調査報告書平成 17～21 年度調査』都留市埋蔵文化財調査報告第 13 集 pp.19-23
- 都留市教育委員会 2016 『三ノ側遺跡』『山梨県都留市内遺跡発掘調査報告書平成 22～26 年度調査』都留市埋蔵文化財調査報告第 15 集 pp.15-18
- 都留市史編纂委員会 1986 『都留市史』資料編 地史・考古 都留市 h
- 平野修 2016 「三ノ側遺跡」『2016 年度上半期遺跡調査発表会要旨』pp.4-5 山梨県埋蔵文化財センター
- 室伏徹・平野修 2004 「大月遺跡について—都留郡家（衙）としての再検討—」『山梨考古学論集』V 山梨県考古学会 25 周年記念論文集 pp.141-158 山梨県考古学協会
- 山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ 1992 『甲斐型土器—その編年と年代—』甲斐型土器研究グループ第 1 回研究集会資料
- 山梨県埋蔵文化財センター 2011 『美濃遺跡 A・C 区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 274 集 山梨県教育委員会・国土交通省関東地方整備局
- 山梨県埋蔵文化財センター 2013 『三ノ側遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 290 集 山梨県教育委員会・山梨県産業労働部



4 区 遠景

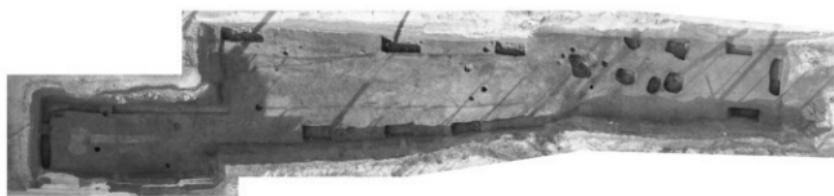


調査区 平成 26 年 2 月 14 日の大雪後の状況

写真図版 2



5 区 2 面 1 号 撃列遺構



7 区 空中モザイク写真



1区 完掘状況



2区 中央西壁土層



2区 北壁土層



2区 北東側完掘状況



2区 1号溝状遺構検出状況



2区 深堀り

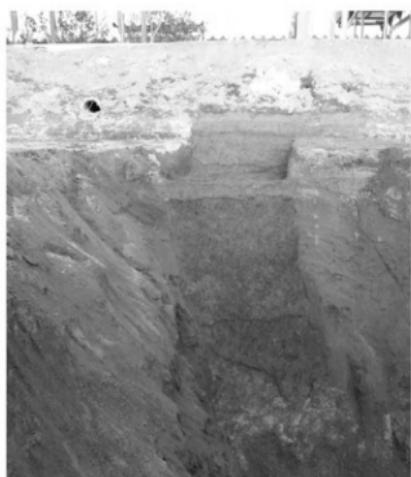
写真図版 4



3 区 全景



4 区 全景



3 区 深堀り



4 区 深堀り



4 区 Pit63



4 区 Pit62



5区 調査前状況



5区 1面北東側遺構集中



5区 1号連続溝状遺構



5区 2号連続溝状遺構



5区 1面4・5号土坑 8・9号溝状遺構



5区 2面1・2号輪列遺構

写真図版 6



空中写真撮影（委託）風景



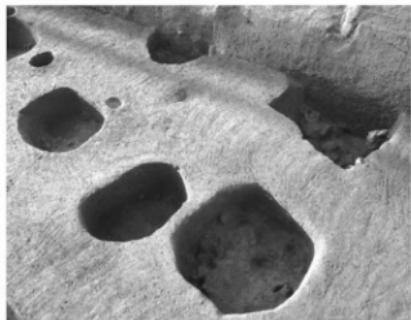
6 区 全景（西から）



7 区 西端西壁基本土層



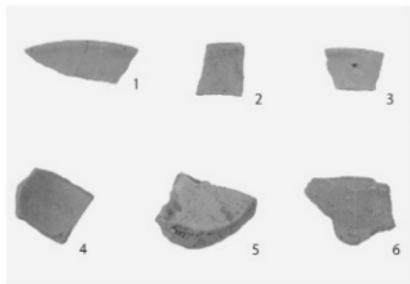
7 区 1号堀立柱建物跡



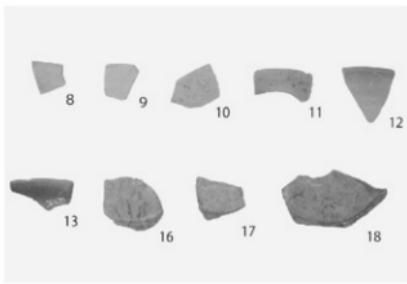
7 区 古代の土坑群



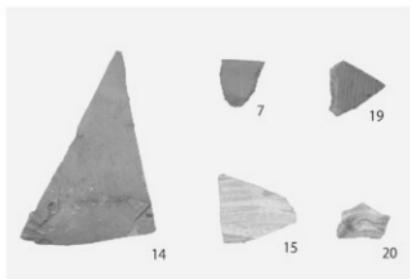
7 区 59号土坑



平成 25 年度出土遺物（1号溝状遺構）



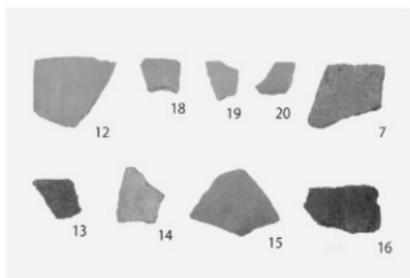
平成 25 年度出土遺物（土師器坏類）



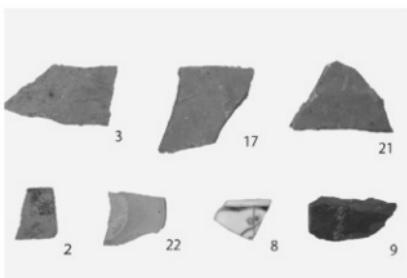
平成 25 年度出土遺物



平成 25 年度出土遺物（ウマの歯）



平成 27 年度出土遺物（土師器）



平成 27 年度出土遺物（中世・近世）

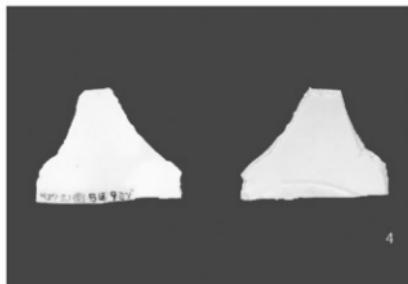
写真図版 8



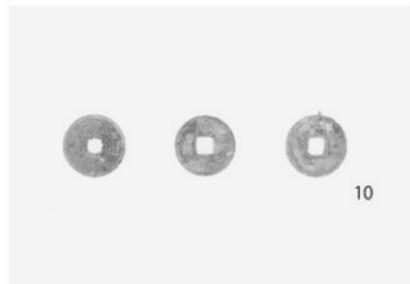
平成 27 年度出土遺物（弥生土器）



2 号連結溝状遺構出土遺物（須恵器転用砥石）



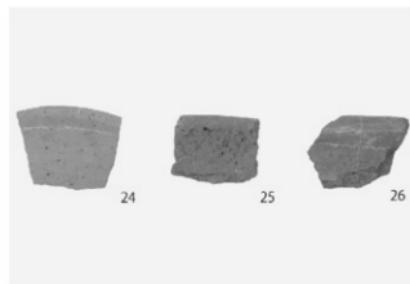
9 号溝状遺構出土遺物（白磁碗）



6 号土坑出土遺物（渡来銭）



2 号連結溝状遺構出土遺物（渡來銭）



平成 24 年度立会（立会②）出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	さんののがわいせき(けんりつるこうじょうかんこうこうちでん) 三ノ側遺跡(県立都留興譲館高校地点)							
副題	山梨県立都留興譲館高等学校建設事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第314集							
著者名	熊谷昌祐・柴田亮平・加速器分析研究所							
発行者	山梨県教育委員会							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016							
発行年月日	2017年3月17日							
印刷所	株式会社峠南堂印刷所							
ふりがな 所取遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯(新)	東經(新)	調査期間	調査面積	調査原因
さんのが わいせき 三ノ側遺跡	山梨県都留市 上谷五丁目7-1外	19204	84	35° 32° 61°	138° 54° 11°	第1期 20131118 ~ 20140228 第2期 20151001 ~ 20160205	5,431m ²	学校建設
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
要約	奈良・平安 集落	時代、中世、 近世	掘立柱建物跡・土坑 (ピット)・溝状遺構・連 結溝状遺構・桿列状遺構	土師器(环・甕)・須恵器転用 砥石・中世陶磁器・渡来銭器	古代以前の遺構確 認面においても調 査を実施した。			
	三ノ側遺跡は、古代都留郡多良郷の中心域に想定されている集落遺跡である。本報告地点は、現状で遺跡の東端にあたるが、調査成果からなおも東側に遺跡が続いていくと想定される。調査では、古代の溝状遺構及び掘立柱建物跡の可能性がある土坑群を検出した。 また、中世や近世と思われる溝状遺構や土坑が多数確認され、古代から現代にいたるまで連綿と土地利用されていいる様子を確認した。							

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第314集

三ノ側遺跡(県立都留興譲館高校地点)

山梨県立都留興譲館高等学校建設事業に伴う発掘調査報告書

印刷日 2017(平成29年)3月10日

発行日 2017(平成29年)3月17日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923

TEL (055) 266-3016

maizou-bnk@prefyamanashi.lg.jp

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社 峠南堂印刷所